JICA 海外協力隊向け実践ガイド［CROSSROADS］

クロスロード

JANUARY
2023
1

特 集

開発コンサルタントとして活躍する先輩隊員の失敗や経験に学ぶ

ニーズの引き出し方

クロスロード

2023 JAN

Contents

表紙によせて

理学療法士としての活動のなかで、多くの方が日本に興味を持っていることに気づき、活動の合間を縫って住民の方々へ日本文化の紹介を実施しました。この写真は習字をとおして日本語に触れてもらおうと、自分や家族の名前、アニメの名前を書いて楽しんでもらったときのものです。皆さん一生懸命に日本語を学んでくれ、活動では知り合えなかった友人も増えました。
岩佐健示さん（チリ／理学療法士／2017年度3次隊・千葉県出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集
6 開発コンサルタントとして活躍する先輩隊員の失敗や経験に学ぶ
ニーズの引き出し方

14 派遣国の横顔 バングラデシュ
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり＆アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを！ ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

■国別索引

	掲載ページ
ウガンダ	28
カンボジア	31
キルギス	4
グアテマラ	12
ケニア	22
タイ	22
チリ	1
ドミニカ共和国	26
ネパール	2、21
パプアニューギニア	10
パナマ	5
バングラデシュ	16、17、18
フィジー	34
ベナン	7
モロッコ	36
ルワンダ	24

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	24、28
村落開発普及員	7、10、36
コンピュータ技術	18
プログラムオフィサー	17
野菜	12
農業化学	5
マーケティング	22
観光	31
環境教育	2、26、34
染色	16
料理	4
作業療法士	21
理学療法士	1
感染症対策	17

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
北海道	18
秋田県	7、31
東京都	5
千葉県	1、10、16、26
埼玉県	4
群馬県	12
神奈川県	17
富山県	34
福井県	28
愛知県	21
兵庫県	2
奈良県	22
福岡県	22
佐賀県	36
熊本県	24

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

「ポイ捨てしないで」などのメッセージを書いたゴミ箱を製作。この取り組みを提案した女の子（写真右端）と松浦さん（写真右から2人目）

街でゴミ箱を設置する小学生と、活動を支えてくれた現地の女性

子どもたちに伝えたいSDGs
世界の学校

廃品を利用したゴミ箱を街中に設置し、環境教育への取り組みを実践しました

松浦千鶴（まつうら ちづる）さん（ネパール／環境教育／2017年度3次隊・兵庫県出身）

ネパール西部の、ヒマラヤ山脈を遠望できる高地にあるバグルン市で環境教育に携わりました。ネパールというと貧困率が高いイメージもありますが、食べ物はみんなで分け合う、学校で教科書や文房具が足りなくてもみんなで貸し借りするといった助け合いが根づいていました。バグルン市では役所に属し、はじめの数カ月は市内の小学校を巡り、「このような活動をしたいです」と説明して回りました。理解を示してくれた7～8校を中心に、週に1回程度学校を訪問し、1～6年生を対象に授業を行いました。

授業では、子どもたちにまず日本のきれいな街並みを見せてから、かつての日本のゴミだらけの河川の写真を見せると、皆一様に驚いていました。環境を美しく保つのは心がけ次第だと伝えられたと思います。

実際の取り組みとしては、子どもたちが主体となって市内のさまざまな場所にゴミ箱を設置しました。たまたま知り合った家庭が飲用水の販売業を営んでおり、そこの小学6年生のお子さんが家にたくさんある水の空き容器（ボトル）をゴミ箱として活用できないかと提案してくれたのです。あとから知ったのですが、その子は学校で私の授業を受けたことがあり、そこで学んだことが発案のきっかけになったそうです。

ボトルのなかにゴミを回収しやすいよう袋をかぶせたゴミ箱を、繁華街の電柱などに計285個設置。「ポイ捨てをなくそう」というこの取り組みは、市の職員も手伝ってくれ、現地の新聞にも載りました。ゴミ箱の中身はゴミ収集会社の職員が回収してくれました。10カ月後にゴミ箱の調査をしたところ、持ち去りや破損で65個に減っていました。維持できなかったものもありますが、子どもたちを中心にしたこの活動は、市民の環境への意識を高める一歩になったと思います。

Text＝村重真紀　写真提供＝松浦千鶴さん

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Kyrgyz

「聞く努力」で乗り越えた語学の壁 自分の言葉で日本の料理や文化を伝えたい

里見（さとみ） 遥（はるか）さん（キルギス／料理／2021年度4次隊・埼玉県出身）

シニア海外ボランティアとしてトルコに派遣されて野菜栽培の指導をした父の背中を見て育った私は、いつか自分も！と協力隊への参加を夢見てきました。希望していた料理の職種は実務経験が必要だったため、大学を卒業したあとは海上自衛隊の給養員（※1）として3年間勤務し、念願かなって2022年2月からキルギスの職業訓練校で活動しています。ようやく生活にも慣れて余裕が出てきたところですが、派遣当初は言葉の壁にぶつかり、くじけそうになりました。

派遣前訓練でキルギス語を学んだものの、こちらに来て耳にするのは教科書に載っていないような言葉ばかり。キルギス語を話していると辛うじてわかっても、内容までは理解できませんでした。しかも旧ソ連圏のキルギスでは公用語がロシア語なので、レストランのメニューやスーパーに並んでいる商品名はすべてロシア語表記です。最初はスマートフォンを握りしめ、翻訳アプリを頼りに買い物をするのがやっとでした。配属先では、とにかく話さなければという気持ちとは裏腹に言葉が出てこず、せっかく派遣されているのだから何かを成し遂げたいという気負いばかりが空回りする毎日でした。

ただ、そうした日々のなかでも、料理を作ったり、トイ（※2）と呼ばれるパーティに連れて行ってもらったり、現地の人たちとできるだけ一緒に過ごすことは心がけていました。

そうしてとにかく会話のなかに身を置いているうちに、不思議と言葉が出てきやすい相手がいることもわかり、話しやすいと感じる人と意識して接するようにしました。少しずつ人の輪や生活の幅が広がり、コミュニケーションが増えることで、現地の言い回しやニュアンスに耳が慣れてきたように思います。やはり、言語を習得するうえでは、話すよりも聞くことが先なのだと実感しました。

派遣から半年後に受けた語学フォローアップ研修の成果もあり、今は周りの人たちとの距離がぐっと縮まったのを実感しています。「私、こんな表現できたっけ？」という言葉が自然と出てきて自分でも驚くことも。語学が上達したことでやっと活動のスタートを本格的に切れたように思え、現地の人たちを巻き込んでいろいろな活動をしたいと前向きになれました。最近は、先生方と共に日本料理のレシピを考えたり、校外で日本料理を振る舞う催しを開いたりしています。派遣前に作成したキルギス語の味噌作りの動画もぜひ活用したいです。私なりの言葉で、日本の伝統食をキルギスの人々に紹介していきたいと思います。

1 着物を着て寿司を皆に振る舞った
2 ビーツをすりおろして酢飯に赤く色をつけ、花をかたどった華やかな手巻き寿司は、キルギス人にも大好評だった

※1 給養員…海上・航空自衛隊において、任務や訓練に従事する隊員の毎日の食事を用意する専門の職種。

※2 トイ…キルギスで誕生日や結婚式などお祝い事があるときに開かれるパーティやイベントのこと。

Text＝海原美帆（p4-5）　写真提供＝里見 遥さん（p4）、明智洸一郎さん（p5）

from Japan

継続は力なり―絶滅危惧種の野生ランを守り 情熱を咲かせ続ける

明智（あけち） 洸一郎（こういちろう）さん（SV／パナマ／農業化学／2000年度0次隊・東京都出身）

製薬会社を退職後、シニア海外ボランティアとして野生ランの保護要請でパナマのエルバジェという地域に派遣されたのが2000年のこと。それがきっかけとなって20年以上にわたりCOSPA（※1）の代表として活動を続けています。

パナマは野生ランの宝庫として知られていますが、なかでも国花のエスピリトサントという白いランはスペイン語で精霊という意味を持ち、ワシントン条約で取引が厳しく規制されています。もともと農薬の研究開発をしていた私は、バイオテクノロジーでこうしたランの希少種を栽培し増やすために派遣されましたが、現地調査をするうちにそれは実態にそぐわないと気づきました。ランの激減は熱帯雨林の伐採による生育環境の悪化の影響もありましたが、止まらない乱獲が原因であると知ったからです。

野生のランを不法に採取して市場で売っている人たちに、ランを保護することの大切さを理解してもらわなくては根本の解決にはなりません。一個人としてまず自分にできることは粘り強く対話を重ねることでした。

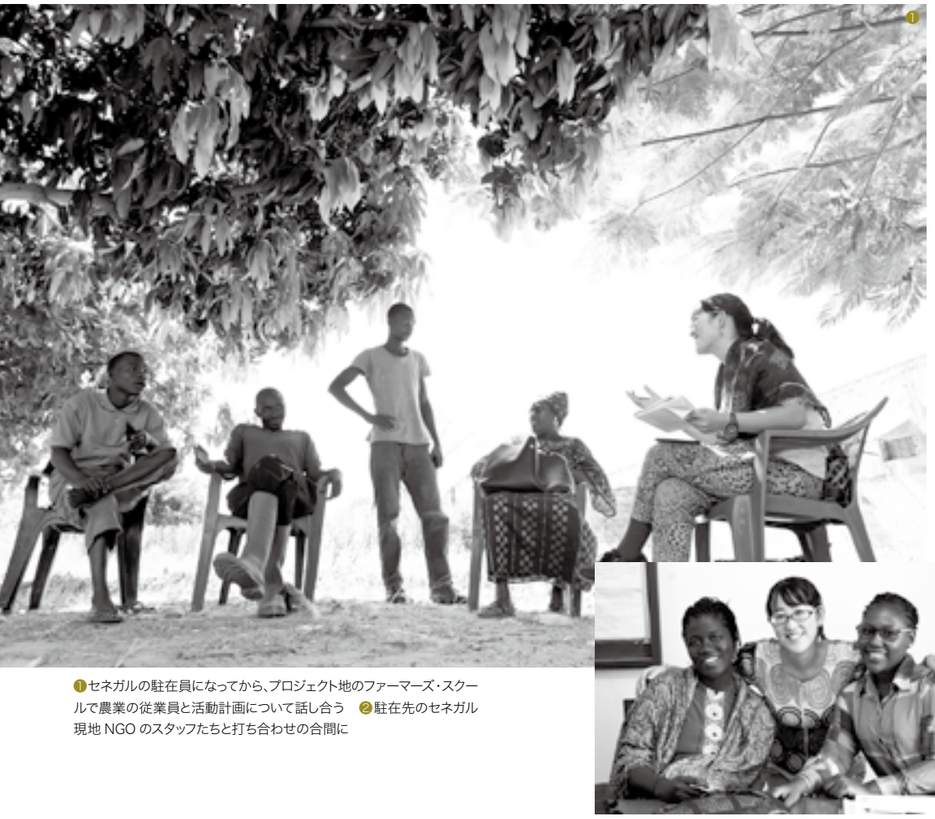
現地で保護活動をしている人にも地域主導で活動することの大切さを伝え、APROVACA（※2）というランを栽培する協会の設立にこぎ着けました。拠点となるラン保護センター建設の際には、地元でつくった組織を今後も継続させ、雇用を創出していかねばならないという思いから、必要な資材や道具などはすべて現地調達することにこだわりました。ラン保護センターの竣工式（しゅんこうしき）は私が帰国するほんの数日前のことでした。

そして、このままでは終われない、日本にいてもAPROVACAの支援を続けねばとの思いで立ち上げたのがCOSPAです。私のあとに派遣された隊員をはじめ、多くの人たちの力を借りながら活動を続け、今に至っています。外務省の「草の根・無償資金協力」やJICAの「草の根技術協力事業」のおかげもあり、ユースホステルなどの施設や自然保護区内の遊歩道も整備されてエコツアーも行われるようになりました。そのようななかで、私たちにできることは教育です。エルバジェの貴重な観光資源であるランを〝採って売る〟のではなく〝守って見せる〟のが大切、との気づきこそが保護活動につながると考え、現地の高校生などに講習も行っています。

こうした活動を通して、14年にはパナマで最も名誉あるマヌエル・アマドール・ゲレーロ章を賜りました。COSPAの活動も今年21年目を迎え、今後もパナマとの懸け橋でありたいと身の引き締まる思いです。同時に、若い世代にも私たちの活動に関心を持ってもらいたいと熱望しています。

1 パナマ国花のエスピリトサント。中央にハトが座っているように見え、とてもよい香りがする
2 ラン保護センターのセミナー室。APROVACAの文字が見える。ここで地元の高校生に研修を行う
3 APROVACAによって整備されたセロ・ガイタール自然保護区の観察路

※1 COSPA…Conservacion de Orquideas Silvestres de Panama（スペイン語で「パナマの野生ラン保護活動」という意。明智さんが2002年に立ち上げた団体）
※2 APROVACA…Asociación de productores de orquídeas de El Valle de Antón y Cabuya（エルバジェ・デ・アントンおよびカブジャ地域の蘭栽培者協会のこと）



❶セネガルの駐在員になってから、プロジェクト地のファーマーズ・スクールで農業の従業員と活動計画について話し合う　❷駐在先のセネガル現地NGOのスタッフたちと打ち合わせの合間に

CASE 1

ニーズを聞かない。真のニーズは相手の話から自然と出てくる

「任地のニーズを引き出すために大切なのは、要請内容に固執しすぎないことですね」。現在は、NPO法人ムラのミライのコンサルタントとして、セネガルに駐在している菊地綾乃さん。ベナンに赴任していた協力隊時代の体験を振り返りながら、こう話し始めた。

「村落開発普及員（現・コミュニティ開発）として首都ポルトノボの幼児・初等教育省に配属され、要請に沿って同僚と市内の学校を巡回し、ゴミやトイレ、手洗いなどの問題を解決しよう、学校保健をやるんだ、と一点集中していました。でも上層部と現場の意見は必ずしも一致していませんでしたし、私がこれをやらなければいけないと決めつければ決めつけるほど、真のニーズから遠ざかっていったことも。要請内容は柔軟に捉え、ニーズを決めつけないことがまずは大切だと思います」

では、どうやってニーズを見つけていけばいいのだろう。

「現地の人から話を聞くことです。そこで重要なのは、ニーズを聞かないことです。例えば現地の人に『あなたの問題は何ですか』と聞くと、相手は『私には何か問題があるから、改善してもらわなきゃいけない』と思ってしまいます。問題がないケースもありますから、問題ありきが前提になるのはよくありませんよね。また、『困っていることはないですか』と聞くと、現地の人は『この人は何かしてくれるだろうから何か言おう』と考え、さほど必要がないもののあったらいいな、という程度のことを提案させてしまう可能性もあります。相手に主体性を持たせるにも、大切なことは、相手に話してもらうことです。聞いていくうちに相手の言葉のなかに何か引っかかることが出てくるかもしれません。それこそが本当のニーズ（課題）なんです」

このようにニーズありきではなく、まず相手の話を聞く、相手から教わるというスタンスこそ、ムラのミライの創設者である和田信明氏が編み出し、現代表の中田豊一氏が体系化した対話型メタファシリテーションの手法の一つである（9ページ参照）。

「聞くときのポイントは、現場をよく観察し、相手の身近にあるものを切り口に聞いてみます。そうすると、その人の暮らしている環境や社会のことが見えてきて、こちらの思い込みや違和感に気づくことができます。そこから、さらに掘り下げていくと、その経緯な

現地の人の話を聞くことが大切！

菊地綾乃（きくち あやの）さん
ベナン／村落開発普及員／
2012年度2次隊・秋田県出身

大学卒業後、協力隊活動を経て、ケニアのNGOでインターン、福島県で東日本大震災の復興支援をしているボランティア団体での活動を経て、2017年からNPO法人ムラのミライのセネガル駐在員として活動。現在はセネガルで農業指導員の育成をしながら、メタファシリテーション講座の講師も担当。

開発コンサルタントとして活躍する先輩隊員の失敗や経験に学ぶ

ニーズの引き出し方

JICA海外協力隊として着任したら、まずは要請内容と派遣先が抱える課題が合っているかを確認し、派遣先での真のニーズを見極める必要があります。現地の方々とどのように接して、どんな聞き出し方をするとよいか。現在開発コンサルタントとして活躍されている3人の先輩隊員に、協力隊時代の失敗を振り返ってもらい、また仕事を通して身につけた途上国の方々との会話や対応のコツや技法などを教わりました。

Text＝池田純子　Photo＝ご協力いただいた各位

❶協力隊時代、NGOのスタッフを招き、ベナンの小学校教員にゴミの再利用に関する啓発活動を行った　❷駐在先のセネガルで、農業研修生の畑でモニタリング
❸ファーマーズ・スクールで作っているコンポスト　❹土壌保全のわらマルチが施されていたセネガルの農業研修生のピーマン畑

どがわかり、自然とニーズ（課題）が浮き出てきます」

ダメなところでなく できているところから切り出す

とはいえ菊地さんが、その大切さに気づいたのは、ずっとあとのこと。協力隊時代は、うまく聞くことも、ニーズを引き出すこともできなかったという。

「まず『何か困ったことはないですか』と聞いてしまって、自分の首を絞めたことは何度もあります。例えば私は、地域の小学校を回り学校調査をしていましたが、全校生徒400人に対して、トイレが二つしかないという学校もありました。そこで校長先生に問題点を聞くと『新しいトイレがほしいから、一緒に何かプロジェクトをやろう』と提案されます。それにはお金もかかりますが、協力隊は資金提供ができないので、私自身も苦しくなりました」

さらによくなかったのは、最初に相手の弱い部分を突いてしまったこと。

「ダメなところから話し始めると『政府がお金を出してくれないからできない』など、言い訳ばかりになってしまいます。そればかりか支援する側、される側という立場もつくってしまう。でも、よくできているところから話し始めれば、こちらは相手の立場に立てるし、相手もモチベーションが上がり、お互いにそこから何か応用していこうという発想にもつながります。実際、教室のデコレーションを頑張っている学校や定期的に一斉清掃している学校もありましたから、そこから別の活動に結びつけることもできただろうと思います」

何かしてやろうという スタンスは危険

また、何かしてやろうというスタンスでいたため、活動のあちこちにほころびをもたらしたという。

「先輩隊員の時代から使われてきた、学校に対する評価表というものがありました。例えば〝校庭はきれいですか〟〝トイレの構造は頑丈ですか〟などです。ただ、当時の私は、詳しいことはわからないのに主観でチェックしていました。〝先生のやる気はありますか〟という設問もあって、それこそ主観ですよね。一方的にジャッジしたり、評価したりすることで、自分で立場をつくってしまい、優越感に浸っていました。相手のことを知ろうというスタンスではなく、何かしてやろうというスタンスだと、そうなってしまうんですね。主観で評価を低くつけていた先生も、あとになって実は情熱あふれる人ということがわかり、自ら可能性をつぶしていたと反省しました」

しかしながら、ニーズを思うように引き出せなければ焦りも出る。

「わかります。でも自分が何かしなくても、相手との関わりのなかで、相手自身がこうしないといけないと気づくことがあれば、それは一つの成果だと思います。例えば私は今、農家の人たちとやりとりをしていますが、みなさん『水がない、だからこの栽培ができない』とおっしゃる。そうしたときに『井戸を掘りましょうか』とこちらが言ってしまうと、農家の人たちは『じゃあお願いします』と、自分ごとになりません。そうではなく『今、井戸に使える水がどれくらいあるか知っていますか』などの事実質問（※）を重ね、農家の人たちに話してもらう。すると農家の人たちは自分たちの課題に気づくことができます。相手の主体性を引き出すことで、こちらもまたさまざまな気づきが得られます。双方の気づきがあって初めて次の行動につながりますから、ニーズが思うように引き出せないと焦るときは、事実質問から始めてみてください。必ず突破口が開けるはずです」

落ち込んだときの 対処法

“草の根の外交官”として草の根活動を行うことが協力隊の存在意義ですから、大きな変化を起こすことは難しいかもしれません。「何かできたらすごい」「できなくても当然」というスタンスでいれば、それほど落ち込むことはありません。困ったことが起きたら、現地の人に相談すると対処方法を示してくれるので、一人で抱えないことが大切です。

＼ニーズを引き出す／ 3つの効果的な方法

1. 要請内容に固執しない
2. ニーズを聞かない
3. 相手の話を聞く

※事実質問……相手の感情ではなく、事実に迫りたいときに聞く質問の方法。いつ、どこ、誰、何といった単純な疑問詞を使い、「なぜ～？」は使わない。「～したことがありますか？」と経験を、「～を知っていますか？」と知識を、「～がありますか？」と何かの有無や存在を尋ねていく。

メタファシリテーションの実例

メタファシリテーションとは、NPO法人ムラのミライの創設者である和田信明氏が一連の国際協力の経験を通して培った対話技術を、現代表の中田豊一氏が体系化したもの。現地の人への会話や事実質問を通じて、相手が自分の置かれている状況を的確に把握し、そこから自分たちで課題に気づき、解決まで導く方法を指します。相手から課題が出てくる働きかけを促すことから、こちら側の主観が取り払われて、客観的に同じ景色を見ることができるのが大きなメリットです。主役は、あくまでも相手。国際協力の場だけでなく、日常生活や仕事の場面でも大いに活用できる方法です。菊地さんのお話とブログから実例を紹介します。

実例1 農家の人が「水がない」から、作物の栽培ができないと言った場合。

私「今、どれぐらいの水が使えるか知っていますか」（簡単な事実質問からスタート）
相手「知らない。井戸にちょっとはあるけれど、ちょっとしかないんだ」
私「ちょっとというのは、どれぐらいですか」（相手の答えに対して質問）
相手「わからないけど、少ししかない」
私「作物の栽培期間は、何カ月ぐらいで、全部でどれぐらいの水が必要なんですか？
それでどれぐらい水が足りないんですか？」
相手「わからない……」

相手は「水がない」という感覚だけで話をしていましたが、水がどれぐらい不足しているかは知りませんでした。ニーズ（課題）は「水がほしい」ではなく、作物の栽培のためにどれぐらいの水が必要で、その水を確保するには、どういう方法があるのかを知るということだったのです。このやりとりで、私自身も彼らの認識が間違っていたことを理解しました。

実例2 「村に十分な水がない」と言っていた村の人たち。最近、洪水が起こったという話も出ています。

私「このなかで、いちばん年上なのは、どなたですか？」
村人1「私です。57歳です」
私「あなたが覚えている限り、最初に洪水が起こったのはいつですか」（まず事実を聞く）
村人1「うーん、1960年代かな」
私「そのあとは？」
村人1「1990年から2000年の間かな」
私「そのあとは？」
村人1「……去年」
私「今までなかった洪水が起きているようですが、いったい何が起きたのでしょうか」
村人2「雨の量が多くなったのかな。それとも……」
私「ではその流れ出た水はどうなりましたか？
その水を使うことができますか？」
村人3「はい。水をためて、畑の水やりに使えます」
私「ため池などに残っている水ではなくて、あふれ出た水はどうですか？」
村人「……」（あふれ出た水は使えないと気づいた）

あふれ出た水はもう使えないという事実を、村人たちが知ったやりとりです。このあと、みんなで村を歩き、村人たちは干上がった井戸や根が露出したヤシの木などを目にし、洪水が起き始めた40年前から、土壌を守るために何もしてこなかったことに気づきました。どうやって土壌を守り、水を蓄えるのか、これらを一緒に考えていくことがニーズ（課題）になります。

実例3 ある農家から「井戸を掘ってほしい」と言われたときのこと。

相手「新しい井戸が二つほしい。井戸づくりの支援はしてもらえないのか？」（よく聞く要望）
私「井戸が二つ必要というのは、どうやって計算したのですか？
あなたの畑にどれだけの水が必要かわかりますか？」
相手「はっきりとは、わかりません」
私「結婚式でチェブジェン（魚の炊き込みご飯）を作るときには、ゲストが100人来るなら100人用、1000人来るなら1000人用って作るんですよね？」（相手に身近な例で話す）
相手「そうですね。どれぐらい水が必要か計算してみます」

「井戸を掘ってほしい」は、現場ではよくある要望です。しかし井戸を掘るだけでは、費用がかかるうえ継続的な支援になりませんから、まず畑にどれぐらいの水が必要なのか、チェブジェンといった相手の身近な例に置き換えて質問していきます。その結果、相手に「必要な量を計算する」という気づきをもたらし、そのうえで水を手に入れる方法を考えることがニーズ（課題）とわかりました。

メタファシリテーションを勉強したい人は……

❶『途上国の人々との話し方』
❷『対話型ファシリテーションの手ほどき』
❸『南国港町おばちゃん信金 「支援」って何？“おまけ組”共生コミュニティの創り方』
❹ムラのミライ主催の各種オンライン講座「メタファリシテーション講座」

❶はメタファシリテーションの基本的な考え方から実践方法までを網羅した一冊。❷はそのエッセンスが詰まった簡易版。薄いので読みやすい。❸はムラのミライの職員が、インドでプロジェクトを行ったときの出来事をつづった本。失敗談の「あるある」がたっぷり盛り込まれており、人の振り見てわが振り直せといった教科書になる。❹オンライン講座では講師の対話例を聞いたり、対話の練習ができる。

ムラのミライウェブサイト
https://muranomirai.org/

CASE 2

ニーズを知るには仮定を持つこと。そのための情報収集は必須です

髙梨直季さん
パプアニューギニア／
村落開発普及員／
2010年度4次隊・千葉県出身

大学院で教育と開発を研究し、協力隊に参加。帰国後、協力隊専用の就職サイトを利用し、株式会社かいはつマネジメント・コンサルティングに就職し現職。専門分野は民間会社の海外進出支援、新規事業開発、市場調査など。アフリカやベトナム、パプアニューギニアなどの案件に関わっている。

協力隊時代は、村落開発普及員としてパプアニューギニアで、現在は開発コンサルタントとしてアジアやアフリカを中心に活動している髙梨直季さんは、「現地のニーズを引き出すためには、任地の情報を調べておくことが大切」という。

「ニーズを知るには、仮定を持つことが大前提ですが、そのためにはまず任地のことをしっかりと調べておくこと。任地のことを全く知らないまま、何か困っていることは何ですか、ニーズは何ですかと聞かれても相手は困ります。コンサルタントも同じで、例えば『アフリカで農業機械のニーズを探ってきてください』と言われた場合、そもそもその国に適している作物が何かを知らないまま、何の農業機械がほしいですかと聞いても、相手も『おまえ、それも調べていないのか』って思われてしまうんです」

そう話す髙梨さんも、かつては事前情報や先入観があると、現地を色眼鏡で見てしまい、相手の真のニーズがくみ取れないのではないかと思い、あまり下調べをしなかったという。

「そうじゃないんですよね。事前情報があること、かつ色眼鏡で見てしまうことを心得たうえで、相手の話を聞く。この二つを組み合わせないと、本当のニーズはつかめないと思います」

事前情報があることで、相手の話からもニーズを見つけ出しやすくなるという。

「話を聞くときは、できるだけ相手に話してもらいますが、そのときに事前に調べていれば、相手の話のなかからキーワードを見つけやすくなります。キーワードが見つかったら、そこを深堀していくわけです。相手に時間がないと言われたときも、質問を絞って聞けるので、よい調査結果を持ち帰れることが多いですね」

「お金がない」と言われたときこそ腕の見せどころ

相手の話を聞くときに、よく言われるのが「お金がない」。身もふたもないせりふに、前に進めなくなってしまう隊員も少なくないだろう。

「すべてにおいて『お金がないからダメだ』というのは、よくある話です。でも、何が不足してるのか、物品なのか技術なのか、それを聞いていくと、物品なら代替できるものもあるし、技術なら周りの人間の知力を結集してできることもあります。お金がないなら、どうすればいいかを考えるのが協力隊として重要なところですし、相手のニーズに応えるやり方だと思います」

髙梨さん自身も、協力隊時代に隊員同士が持つノウハウ・技術を共有する研修を開いたことがある。ただし、途上国でこういった研修を開いても、なかなか参加者が集まらないのも実情だ。

「現地の人にとって、研修というのはアディショナルワークなんですよね。研修なんか出なくても生きていけるし、なぜ給料ももらえないのに自分の時間を使って仕事の負担を増やしてまで出なきゃいけないのかという話になる。日当や宿泊費をもらっても割に合わないと。でも絶対に役立つ研修であれば、たとえ日当が安かったり、なかったとしても来てくれます。それでも来ないなら、もしかしたらニーズの読み違えがあるかもしれない。単に善意の押しつけになっているかもしれない。こういう研修がプラスになるだろうと思っていても、参加者が集まらなければ、それが本当にプラスになるかどうかは改めて考える必要があるということです」

プロジェクトをするということは、相手に負担をかけるということ。その前提を忘れてしまうと、自分たちが援助者だというおごりが出てしまい、活動がうまくいかなくなる可能性があると髙梨さんは常々感じている。

「私自身、コンサルタントとして、時にそういう気持ちで対峙（たいじ）している自分に気づくことがあります。その気持ちをなくすことは難しいけれど、それはよくないとおごりの気持ちが湧き出るたびに、自戒しています」

さらにニーズを引き出すために、相手の話を聞くのと同じぐらい、現地に足を運ぶことも重要だという。

「現地に行ったからこそ、起きていることや実際のニーズがわかるので、私は可能な限り、現地に足を運び検証することで、本当のニーズをつかんでいます」

マイナスからプラスになっただけでも大きな成果

今でこそ事前調査から仮説を立てて、計画的に動いている髙梨さんだが、東セピック州のコミュニティ開発部に配属された協力隊時代は、行き当たりばったりだったという。それこそ学校や幼稚園に突然訪問をして、やってほしいことを聞き、その場で実施するという方法で行っていたため、華々しい成果は上げられなかったと振り返る。それでも自分なりに成果と思える部分もあったそうだ。

「私の場合、前任者が配属先とうまくいかなかったようで、着任直前に『協力隊は必要ない』と配属を拒否されたんです。それを調整員の方が説得して、なんとか配属を認めていただいたという経緯がありました。ところが、私が任期を終えるときには『次の協力隊は来ないのか』と配属先の気持ちが変わっていました。マイナスから始まったけれど、最後は多少プラスに持っていくことができた。それだけでも私にとっては成果だと思っています」

持ち前のガッツで、最初に立ちはだかった壁を見事乗り越えた髙梨さん。髙梨さんほどではないにしても、最初の壁は誰にでもある。そんな壁を乗り越えるための秘訣（ひけつ）を最後に教えてもらった。「今もそうですが、その国の言葉は使えなくても、習おうという姿勢は見せます。食事もなるべく地元のものを食べて、その感想を地元の人に伝える。そういう小さな積み重ねが大切だろうと思っています。例えば現在、ベトナムの養豚の案件に関わっていますが、ブンチャーという豚料理があるので『ブンチャーを食べましたよ』というところから話を始めます。そうすると相手は養豚の事業に来て、豚肉を食べて、しかもブンチャーというベトナム語をしゃべっている、と喜んでくれます。相手のことを理解しようとしないで、信頼関係を築いてもらおうというのは、虫がよすぎる気がします。まずこちらから理解する。そのために事前情報を集めるということです」。

写真4点はすべてコンサルタントとして、パプアニューギニアの医療廃棄物管理案件について関わったときのもの。❶最終処分場近くの村で、村の概要を聞いているところ　❷廃棄物処理担当者から医療廃棄物処理の現状について聞き取りを行った

❸医療機関との議論をファシリテーションする

❹パプアニューギニアの投資庁に対してスキームについて説明する

情報収集の仕方

任地の情報を調べるときは、JICAのプロジェクト報告書や調査報告書が役立ちます。その国がどういう方向に向かっていて、どういう分野で何が必要とされているかということが詳しく載っているので、ほかの国でも類似分野や類似事業の参考になります。JICA図書館で検索できますし、現地の事務所に問い合わせても、読ませてもらえると思います。

落ち込んだときの対処法

失敗は山ほどありますが、多くは自分のなかで深刻に捉え過ぎ、いらぬ心配までして落ち込んでいました。そんなときは趣味に没頭したり、早めに寝たりしてリセットします。料理が趣味なので、協力隊時代は牛骨を煮出して1日かけてラーメンを作ったことも。落ち込んでも、それがわかってラッキーだったとポジティブに捉える。成果は自分の捉え方次第です。落ち込んだときほど、自分のしてきたことを棚卸しするのがおすすめです。

＼ニーズを引き出す／ 3つの効果的な方法

1. 任地の情報を調べておく
2. お金がないなら代替案を提案
3. 現地に足を運ぶ

CASE 3

全体をよく観察したら設計図を描いてプレゼンを

❶協力隊時代、大学圃場で学生に育種指導をしているところ　❷協力隊時代にお世話になった同僚たち　❸コンサルタントになってから、グアテマラの保健センターでハイリスク妊婦向け栄養指導のモニタリング　❹JICAの「グアテマラ国妊産婦と子どもの健康・栄養改善プロジェクト」で供与した超音波診断装置で、異常が見つかった妊婦の出産後の様子を家庭訪問　❺バングラデシュでのプロジェクト開始にあたり、まず看護師に対してプロジェクトの説明とニーズの引き出しを行う

現在は保健系開発コンサルタントとして中米やアフリカで活動している宇田川珠美さん。大学と大学院で農業を学んでいたため、協力隊の職種は野菜を選択し、グアテマラの大学の農学部に赴任した。要請内容は「大学の農学部で学生に野菜の栽培指導」だったが、その目的が国の農業に寄与する人材を育てるためなのか、大学の教育レベルを上げるためなのかなどが不明で、ニーズを引き出すまでに、ずいぶん苦労したそうだ。

「最初は要請があるぐらいだから、現地の人からあれをやってほしい、これをやってほしいと頼まれるだろうと思っていたんですが、いつまでたっても頼まれない。でも相手の立場からすると、言葉もろくにできない若者が来て、『あなたは何がしたいのですか』『私は何をしたらいいですか』って聞かれても、何も出てこないですよね。それで私は4カ月ぐらい時間を無駄にしてしまいましたが、今思うと最初に、大学やカウンターパート（以下、CP）、同僚など、派遣先全体を俯瞰してよく観察して、そのなかで自分ができることを見つけるべきでした。そのうえで、こちらから提案してニーズを引き出していけばよかったと今は思います」

提案する前には、自分のなかで課題を整理して、解決方法の設計図を描くことが大切という。

「私の場合、任地の大学の圃場を見学したときに、問題点やここをよくしたらもっとよくなる、ということは感じました。でも、現地の人にこうしたいと説明するときに、きちんとした理由や将来の着地点が設定されていなかった。だから会話に発展性が出ないし、相手からのニーズも引き出せないということに、派遣途中で気がつきました。例えば当時のトマト栽培でいえば、収量も少ないし、サイズや品質もバラバラ。それを改善するには、剪定をしたり、棒を立てたりといった技術的な工夫が必要でした。結局のところ、品質と収量の向上を着地点として方法論を教えて、それから畑で実践していきましょうという設計図を見せました。特に難しい活動は計画していません。ただ、何もないゼロの状態から脱すると一気に活動が前進し始めました」

またニーズを引き出すときには、CPと一対一で話すよりも、関係者全員を呼んでプレゼンしたほうがいいとアドバイスする。

「一対一で話すと、話が進まないことも多いと思います。隊員時代の私にはできませんでしたが、関係者全員を集めてプレゼンすればよかったと思います。メンバーのなかに積極的な人がいると、そこから意見が引き出せて盛り上がることがありますから。活動が波に乗ってきたところで、私の専門である育種や実験指導もリクエストされてやりましたが、それなら最初から全員で集まって話し合えていれば、相手に私ができることも理解してもらえて、もっといろいろなニーズが引き出せただろうと思います」

そして、ニーズを引き出し、共通認識を持った活動が始まってからも、自分一人で取り仕切らないことが重要だ。

「関係者を集めたら、チームとしてやっていく。作業の責任者を決めてやっていくと、ここがまずいよね、こうしたほうがいいよね、と改善していき、より良い結果が導き出せます」

結果的に、任期後半の大学の畑は大豊作。品質と収量向上という明確な目標に沿った大学での栽培指導を達成できた。

自分の予測した活動ができれば万々歳

しかし冒頭でも述べたように、赴任後、最初の4カ月は何をしていいのかわからず、棒に振ってしまったという宇田川さん。実質活動できた期間は約1年間だという。特に農業は、そのシーズンを逃すと活動できなくなってしまうので、任期の中盤以降は若干焦ったそうだ。

「できれば授業期間に、種まきから収穫まで行いたいけれど、自分がいる任期中にできそうになければ、やることを絞るなどの工夫をしなくてはなりません。あとになればなるほどできることが小さくなってしまいます。2年なんて、あっという間です。だからこそ最初の活動の設定は肝心なんです」

それでも協力隊時代は、自分の予測したとおりの活動ができれば、万々歳ではないかと話す。

「こういう成果を出しました、と堂々と言える協力隊員のほうが少ないと思うんです。専門家がやるような成果というのはなかなか残せないでしょうし。私の場合は栽培の技術を教えましたが、それよりも大切なのは、活動のなかで関わった人たちとの関係値です。特に配属先、つまりCPや同僚に、仕事に対する意識の変化が芽生えていたら、それこそが成果だと思います。協力隊にしてもコンサルタントにしても成果を求められますが、大事なのは継続性です。そのために必要なのは現場の人々の意識の変化です。ですから、隊員の皆さんにはこれもやらなきゃ、あれもやらなきゃと目に見える成果を求めるだけでなく、配属先の人たちとの関係づくりを大切にしてほしいと思います」

保健系こそ宇田川式手法を取り入れてほしい！

冒頭にも記したように、宇田川さんは現在は保健系開発コンサルタントとして活動している。そこで最後に農業系と保健系のニーズの引き出し方の違いについて尋ねてみた。

「農業系は新しいことを提案すると、いいね、それやろう、と気軽にできるところがありますが、保健系は真逆。どんなにいいことを提案しても、その国の保健省などの方針に反することは無視されます。それは保健が国の機微な情報を扱うデリケートなものだからです。ですから、これまでお話しした『全体を俯瞰して設計図を組み立てる』『いろいろな人を巻き込んでやる』というやり方は、保健系の人にこそ役立つと思いますよ。その国の伝統や文化や考え方がありますので、そこは重んじながら、時に要請内容を柔軟に見直し、軌道修正しながら、ゴールを目指すといいでしょうね」

現地の人との
関係づくりも大切！

宇田川珠美（うだがわたまみ）さん
グアテマラ／野菜／
1998年度3次隊・群馬県出身

大学と大学院で農業を学び、卒業後、協力隊に参加しグアテマラへ。帰国後、JICAや国連ボランティアなどで農業系のプロジェクトに従事。その後、看護師免許を取得し、救急病院の看護師として勤務。2017年にアイ・シー・ネットに入社し、保健系開発コンサルタントとして中米やアフリカを中心に活動を行っている。

観察のコツ

人間関係の観察は、業務に関することで行います。例えば、ある人に業務について相談したときに、誠実に対応してくれるのか、適当にあしらわれるのか、そのあたりの見極めが重要です。特に協力隊は不安定な身分ですから、きちんと対応してくれない人もいます。また内輪話は、相手を批判するようなことをポロッと漏らす恐れがあるので避けましょう。

落ち込んだときの対処法

私の隊員時代は、隊員の人数が多かったこともあり、地方へ派遣された隊員の方が隊員連絡所(現在は廃止されつつある）に泊まったりしていました。活動帰りなどに隊員連絡所に寄ってみんなで日本食を作って食べたりすること、それが私にとってのストレス解消法でした。漫画もたくさんあったので、活動と関係のない漫画をひたすら読んでリフレッシュすることもありました。今なら電子書籍で読めますね。

＼ニーズを引き出す／ 3つの効果的な方法

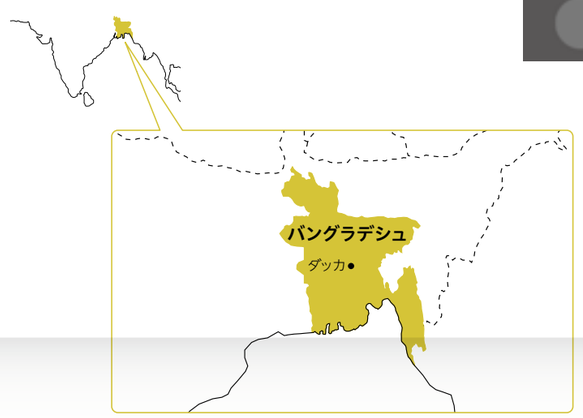
1. 全体を俯瞰して観察する
2. 課題を整理して設計図を描く
3. 関係者全員にプレゼンする

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈バングラデシュ〉

東南アジアと南アジアを結ぶ位置にあるバングラデシュ。
2023年8月、青年海外協力隊の派遣開始から50周年を迎える。

バングラデシュの基礎知識



バングラデシュ人民共和国

面積：14万7千平方キロメートル（日本の約4割）
人口：1億6,468万人（2020年、世界銀行）
首都：ダッカ
民族：ベンガル人が大部分。ミャンマーとの国境沿いのチッタゴン丘陵地帯には、チャクマ族などを中心とした仏教徒系少数民族が居住
言語：ベンガル語（国語）
宗教：イスラム教徒88.4%、その他（ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒）11.6%（2020年、バングラデシュ統計局）

※2022年8月2日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html#section1

派遣実績

派遣締結日：1973年3月24日
締結地：ダッカ
派遣開始：1973年8月
派遣隊員累計：1,284人

※2022年11月30日現在
出典：国際協力機構（JICA）

活気あふれる首都ダッカの街並み（写真提供：谷本美加 /JICA）

若者が多く、可能性と活気にあふれる親日国

自然災害や貧困のイメージが強いバングラデシュだが、近年は経済成長著しく、2026年には後発開発途上国を卒業する見込みだ（※1）。協力隊の歴史やこれから期待される活動について、JICAバングラデシュ事務所次長の中村貴弘さんにお話を聞いた。

日本の4割ほどの国土に1億6000万人が住むバングラデシュ。国名は「ベンガルの国」を意味する。その前身は、1947年にイギリスから独立したパキスタンだ。インドを挟んで東（現バングラデシュ）と西（現パキスタン）に別れ、使用言語も異なっていた。西パキスタン優位の情勢下、50年代に東パキスタンで「西パキスタンの公用語のウルドゥー語ではなく、母語のベンガル語を公用語に」との運動が起き、独立戦争などを経て71年にバングラデシュとして独立した。

先進国で最初に独立を承認したのが日本だった。経済的搾取や独立戦争で疲弊したこの国の厳しい食糧問題に取り組むため、73年に稲作、園芸作物、農業機械の3人の青年海外協力隊（以下、協力隊）を派遣。今日まで続く活動が始まり、今年で50周年となる。

「この国のリーダー層が若かった頃から、隊員は国の各地で人々と同じような生活をし、国の誇りであるベンガル語で活動してきました。おかげでとても親日的で、日本人とわかると『友達の友達に協力隊がいる』と話しかけられます」とJICAバングラデシュ事務所次長の中村貴弘さんは言う。

日本の協力は、農業・農村開発や保健、教育、都市開発、防災・気候変動など多岐にわたり、近年は経済特区や首都の都市高速鉄道（MRT）建設などのメガプロジェクトも多く、経済開発を後押ししてきた。しかし、隊員派遣は、2016年7月にJICA関係者が犠牲になったダッカ襲撃テロ事件（※2）を受けて中断している。

それまでに派遣されていた隊員は1284名に及ぶ。分野は、当初の農業や職業訓練から、時代の変遷に伴う開発課題の多様化に合わせて広がり、ソフト・ハード両面で多くの貢献がある。任期終了後も国際協力分野や研究、NGO活動、起業などで二つの国の懸け橋として活躍する人も多い。

「テロ事件は大変痛ましい事案でしたが、現在の治安は安定しています。テロや犯罪、事故に対する安全対策を徹底し、この国からの『協力隊の復活を』との強い要望に応えて再開に向けて進めています。隊員を受け入れてもらうためのネットワークをもう一度紡ぎ、6年の空白を埋めるべく、22年度短期派遣募集（※3）で再開第1弾となる隊員の公募を予定しています」

この国は経済成長のポテンシャルの大きさで世界から注目され、大きく変貌を遂げつつある。「絶対的貧困から脱し、生活の質の向上、都市と地方の格差解消を目指す段階にきています。そして年齢中央値が27歳と若く、活気にあふれた国です。若い人たちが常に新しいことをしようとしているので、協力隊として来る人には日本のアイデアを基に新しいものを一緒に作る意気込みで来てもらえたらと思います」

バナナ、マンゴー、ライチなど果物が豊富なバングラデシュ

お話を伺ったのは

中村貴弘（なかむらたかひろ）さん

PROFILE
JICAバングラデシュ事務所次長。2000年に国際協力事業団（現JICA）に入団。主にアフリカ地域の農業・農村開発を担当し、エチオピア事務所、イギリス留学、総務部などを経て、18年から現職。

※1…2021年11月24日の第76回国連総会での決議により、卒業見込みが決定された　※2…2016年7月1日、ダッカ市内のレストランにおいて数名の武装グループが人質を取って籠城し、日本人7名を含む約20名を殺害、多数が負傷した事件。7名の日本人はJICAによるダッカ都市交通整備事業協力準備調査に従事していた。
※3…2022年度短期派遣募集期間：2022年12月16日～2023年1月12日

Text＝工藤美和　写真提供＝取材にご協力いただいた各位

ベンガルの人々と共に歩み続けた協力隊

女性の社会進出支援やポリオ根絶、そしてIT人材の育成支援まで、時代と課題の変遷に合わせて活動してきた隊員たちを紹介する。

ワクチン投与の現場を巡回する高橋さん（手前）

家で炊事をする地方村落の女性（写真提供：其田益成/JICA）

高橋真吾（旧姓・中川）さん

感染症対策／2009年度3次隊、
プログラムオフィサー／2011年度9次隊・神奈川県出身

PROFILE

高校時代から飲食店に勤務したのち、協力隊に参加。2017年から2年間、隊員OVでJICA専門家となった妻の赴任に伴いダッカで生活。現在、福井県のインターネット回線販売会社に勤務し地域に根ざした社会貢献事業を担当。起業し、バングラデシュに進出する日本企業の現地サポートを仲介する仕事もしている。

馬場節子さん

染色／1988年度3次隊・千葉県出身

PROFILE

大学で美術教育とテキスタイルを専攻。企業勤務を経て協力隊に参加。帰国後は『クロスロード』誌の編集に携わったのち、日本外国語専門学校の国際ボランティア科の教師に。2007年に教え子とNGO「A&A」設立。現在、NGOの活動の傍ら高校の非常勤講師として美術・工芸を教える。

女性の自立支援と協力隊員としての葛藤

イスラム圏のために当初は女性が活動するのは難しいと考えられていたバングラデシュに女性隊員が初めて派遣されたのは1981年。農村開発局に配属され、農村女性の家庭菜園作りや栄養改善などの取り組みから始まった。そうした隊員たちが大きな問題と感じたのが、女性が自由に家から外に出られないことや、夫に先立たれた場合、経済的・社会的に困窮するなど厳しい状況に置かれていたことだ。農村女性の収入と地位の向上に向け、伝統的な刺しゅうノクシカタによる手工芸品の制作・販売の支援へと活動内容は広がっていった。

「ダッカに着いたのが、先輩の手工芸隊員たちが農村開発局につくったショップ『カルポリ』のオープンの日。各地方にいる手工芸や家政隊員が商品開発や制作指導をし、農村女性たちが作ったものを首都で展示・販売する施設で、画期的だとみんなで喜びました」と話すのは、89年、染色の指導者として派遣された馬場節子さんだ。独立戦争で夫や父を亡くした女性に自立の道を開く目的の婦人局の技術教室でバングラデシュの草木を使った天然染色の技術を教え、都市部に暮らす女性支援の一翼を担った。

馬場さんは、元々あった伝統的な染色を少し発展させる形で、現地で調達できる材料の種類を増やしたり、染色したものでサリーやサルワカミューズなど女性用の服地を作ったりした。

バングラデシュで初めて知った天然染料が多くあったと馬場さんは振り返る。「化学処理をしなくてもしっかり茶色に染まるココナッツ、とても綺麗なピンク色が出るカイガラムシ、鉄を使った黒など、鮮やかで丈夫に染め上がるものがありました。やはり現地に行かないとわからないことでした」

馬場さんは染色の基本を学べる教科書を作成。先輩隊員が残した資料や自ら収集したデータを元にした。「染料や水などの量をどのくらいにするのか、鍋やカップの絵を描いて量を示し、面倒な計算をしなくてもわかるようにしました」

馬場さんが活動したのは、ダッカでも女性が一人で外出することはまだ少なかった時代。生徒は兄弟など家族の男性が付き添うか、2、3人で連れだって通ってきた。中学や高校、大学を卒業した人までいたが、それを生かせる職はなかった。それでも、「技術を身につけてなんとか仕事をしたいという意欲が強く、教えがいがありました」。

一方、生活に困窮し、幼い子供から高齢者まで路上生活者が大勢いた時代でもあった。馬場さんは「教室で少人数に教えていていいのか。もっと何かやることがあるのではないか」と葛藤を抱えながら2年間の活動を終えた。

それから20年の時を経て、専門学校の国際ボランティア科の教師となった馬場さんはスタディツアーを行い、生徒を連れて、南部の海沿いの町コックスバザールに暮らす少数民族ラカインの村を訪ねた。隊員時代に各地の織物や手工芸品を見て回るなかで、その豊かな文化に魅せられ、交流を続けていたという。「なかなか足を運ぶことができず、ずっとご無沙汰していたのですが、女性たちは私の名前を覚えていて、資料として渡した雑誌も大切に持っていてくれたのです。懐かしさと嬉しさで涙があふれてきました」

以降、毎年30人ほどの学生とホームステイをするようになり、ボランティアをライフワークにしたいと、教え子の有志とNGO「A&A」を設立。教育・文化と環境保護の支援を続けている。

ポリオ根絶へワクチン投与の最前線を支えた隊員

2014年、世界保健機関（WHO）は「南東アジア地域」と区分される国々での「ポリオ（※）根絶」を宣言した。この地域に含まれるバングラデシュでは、1999年から延べ68人に上る隊員たちがポリオの根絶に向けた取り組みを後押しした。

2010年にバングラデシュ第2の都市、チッタゴンにある保健・家族福祉省の県事務所に派遣された高橋真吾さんもその一人だ。当時、すでにポリオの国内感染者は報告されなくなっていたため、感染症対策隊員は、ポリオの隣国からの流入による再発の防止と、5歳児未満児死亡の大きな原因だったジフテリア、破傷風、百日ぜき、はしか、結核、日本脳炎などの疾病に対する予防接種を行う予防接種拡大計画（EPI）に協力する形で15人がグループで派遣されていた。

年に2回実施されるポリオワクチンの一斉投与では、事前に担当行政官が村々を回り、接種を担当するボランティアに実施要領を説明。接種前日はヘルスアシスタント（HA）が村の一軒一軒を訪ね、接種対象者を登録する。当日隊員たちは、各接種所を含めた現場に同行して、正しく接種が行われているかモニタリングし、投与記録を正確に残すことや、接種所の衛生やワクチンの温度管理などを細かくアドバイスした。

「市街地から離れると船を乗り継がなければたどり着けない集落があったり、増水した川をズボンを脱いで渡ったり。『雨が降ったら行かない』と言うHAをやる気のない人物だと思っていましたが、一緒に行ってみて、短い日数で

※ポリオ…かつては小児まひとも呼ばれたこの病気は排せつ物などから感染し、子どもがかかると四肢がまひし障害を残す。有効な治療法はなく、予防接種で感染を防ぐことが大切となる。

活動の舞台裏

おもてなしは「おうちカレー」で

予防接種活動で地方を回った高橋真吾さんは、「田舎では外国人が珍しいので、どこに行ってもわらわらと人が集まってくる。そこでベンガル語で自己紹介しただけで、大ウケでした」と振り返る。

高橋さんが日本から来たボランティアだと聞くと、「ウチにご飯を食べにこないか」と招いてくれた。「普段、自分たちは食べていないだろう肉入りのカレーを用意してくれ、お腹いっぱいになってお皿を逆さにして『もう食べられない』と言うまで盛ってくれました。家庭で作った〝おうちカレー〟が本当においしい」（高橋さん）。

バングラデシュのカレー

「チャドカン」と呼ばれる茶店で紅茶を入れている様子

食後は、「チャ」と呼ばれる甘い紅茶とおしゃべりが待っている。ご飯とお茶をごちそうすることがベンガル流のおもてなしで、コミュニケーションを深める手段だ。「1杯5円ぐらいの、小さなカップに入った熱々のお茶を出すお店が至る所にあり、お茶をおごり合っておしゃべりをするのが楽しくて、1日15杯ぐらい飲んでいた」というのは庄子明大さんだ。任地ボリシャルのスラムにある小さな茶店のおばさんは、庄子さんが協力隊員だと知ると、「この国にとって大事なゲストだから」と一度も代金を受け取らなかった。そして、帰国を迎えた庄子さんが任地を離れるときには、川の上にある小さな家に招き、川魚のカレーをご馳走してくれた。「素朴な味と温かい気持ちが忘れられません」（庄子さん）。

科学情報通信技術省のオスマン大臣へのプレゼンテーションを行う庄子さん（左）

2009年11月にIT隊員有志で開催したIT人材育成に向けたセミナー。このときは模擬試験も行った

庄子明大（しょうじ あきひろ）さん

コンピュータ技術／2007年度4次隊・北海道出身

PROFILE

知人のIT企業の創業に参画し経営が拡大・安定したタイミングで、社会に貢献したいと32歳のときに協力隊に。任期終了後は、JICA専門家としてバングラデシュのIT系国家試験導入、地方農村インフラ開発、日本向けIT人材育成などのプロジェクトに従事。バングラデシュ駐在歴は11年超。

一斉投与を行う難しさを実感しました」

そして、隊員たちは現場で見えた課題にそれぞれのやり方で取り組んだ。

「啓発が足りないと感じた隊員はイスラム教のモスクで有力者に話をしてもらう働きかけをし、ワクチン接種で使う注射器の使い方を教えるイベントを行った隊員、季節で移動するため行政が把握できない労働者集団の子どもへの接種に取り組んだ隊員など、みんな自分の強みを生かしていました」

高橋さんは、停電時にワクチン保管用冷蔵庫を稼働させる自家発電のコードが正しくつながっていなかったり、ワクチンが転売されたりといったずさんな管理に気づいたが、「直接配属先に原因を問いただせば、同僚たちとの関係が悪くなってしまう」こともあり、直ちに解決できることは限られていた。それでも、前職の飲食店業務で行っていた棚卸しの経験を生かして在庫量などをチェックし、状況を定期的に保健・家族福祉省の本省に報告した。

「上下関係が強く残るこの国では現場の声は中央まで届かないことが多いので、外国人の立場を利用して中央に実態を認識してもらい、この国の人のなかで解決に向けてもらえたらと思っていました」

感染症隊員は月に1、2回集まり、活動を報告し合った。そうしたなかで生まれたのが、ポリオワクチン一斉投与の作業手順を記載した、投与ボランティア向けリーフレットの刷新だった。ポリオワクチンは経口投与で、学校の先生やイマムと呼ばれる宗教的指導者らにボランティアで行ってもらっていたが、医療の専門性を持たないうえ、事前に配られても読むのを面倒くさがる人がおり、現場で動員された青年などのなかには字が読めない人もいた。そのため、不正確な方法での投与や、投与の済んだ子どもとそうではない子どもの区別ができなくなるなどの混乱が生じていた。

高橋さんたちが作成した、ポリオワクチン投与方法のリーフレット

そこで高橋さんたちは、絵や写真を多用し、作業手順を直観的に理解できるようなリーフレットを作成。チッタゴン県で使用すると好評だったため、翌年からはNGOの資金援助を得て全国で配布してもらえるようにした。

こうした積み重ねが14年のWHOによるポリオ根絶宣言に結実。そして、青年海外協力隊事業の成果の一つと評価され、16年のアジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞につながった。

協力隊が政府を動かしたバングラデシュのIT人材育成

IT資格という武器をバングラデシュの若者たちに与えたい――。この強い思いの下、2008年、IT関連の隊員有志は、現地の若者たちがIT人材として国内外で成功できるよう、自らの能力を証明できる国家資格の導入を目指して政策提言する活動に取り組み始めた。

火つけ役はコンピュータ技術隊員として派遣され、のちにJICAプロジェクトにも携わる庄子明大さんだ。当初は、バングラデシュ・コンピュータ評議会（BCC）の地方センターで、若者やカウンターパート（以下、CP）にコンピュータ技術を教え、国のIT能力向上を支援する活動にあたっていた。「若者たちはポテンシャルにあふれていたものの、BCCなどで教える内容は市民講座レベルで、産業界で通用する即戦力のあるエンジニアの育成にはつながっていなかった。IT分野の隊員は皆同じように感じていました」と庄子さんは振り返る。

転機は08年11月、政情不安で外国人に対する襲撃リスクが高まり、地方で活動していた隊員が任地で活動できなくなったことだった。「首都へ退避した機会にIT関連の隊員一同で集まり、この国のIT人材の育成のために自分たちは何ができるのか議論しました」

当時、バングラデシュにはIT技術者のスキルを証明するための国家試験がなく、人材育成の明確な目標が必要との意見があった。そこで目を付けたのが、日本の国家資格の「情報処理技術者試験（ITEE）」だ。インドなどアジア11カ国と相互認証があり、一度合格すればほかの国でも通用する人材として認められ、働く機会が広がる可能性がある。また、ITEEは国家試験ゆえ欧米の民間資格よりも受験料が安く、より多くの人が受験できる。

「有志でバングラデシュへのITEE導入へ動こう」となった。

09年3月には隊員のCPや大学、民間企業に呼びかけ、IT人材育成について議論するセミナーを開催、「国としてスキル指標を持ってエンジニアを育成しよう」と訴えた。

バングラデシュ政府はなかなか興味を示してくれなかったが、庄子さんたちは、「協力隊員に失うものはない。当たって砕けろと、企業、大学、専門学校から新聞社までアポなしでどんどん訪ねて、啓発して回りました」。

そんな隊員たちの熱意を、JICA事務所もサポートした。同年10月には科学情報通信技術大臣への面会にこぎ着け、導入への検討が本格的に進むようになった。

翌年3月で庄子さんは任期を終えたが、後輩隊員たちが「この国を変える力になる」というやりがいとワクワクした気持ちにあふれたバトンを引き継ぎ、ITEEの導入に向けたステップを踏んでいった。その思いはバングラデシュと日本の政府関係者を動かし、12年にJICAの技術協力プロジェクトに発展。14年にはついにITEEの導入が実現した。さらに日本の産官学の連携により日本企業で働くための人材育成へもつながり、現在、バングラデシュの優秀なIT技術者約200人が日本で活躍するまでになっている。

活動の舞台裏

ベンガル語の詩を大臣と交わした隊員

ベンガル語を守るために独立したバングラデシュ。母語や自国文化への誇りは強く、隊員にとって言葉がとても重要な役割を果たすといえそうな例を2つ紹介する。

ITEEの導入を働きかけるため、科学情報通信技術省のオスマン大臣に面会した庄子さんと小沼位江（たかえ）さん（コンピュータ技術／2007年度4次隊）は、導入についての思いを説明。その後、小沼さんが「コビタ」と呼ばれる詩を詠んだ。コビタは表現方法や韻の踏み方などが伝統的で、知識層に好まれている。大臣が詩をたしなむと事前に聞き、用意してきたものだった。「バングラデシュと日本に橋を懸けていきたい」という内容の詩を聞き、とても驚いたオスマン大臣は「コビタを贈られるとは予想もしていなかった。素晴らしい。その思いに私もコビタで応えたい」と、即興で「バングラデシュと日本に懸かった橋を大きく広げ、多くの人が渡り合えるようにしていこう」と返歌。大臣室は喝采と熱気に包まれ、大臣は隊員の提案内容に対するワーキンググループ発足の指示を出すに至った。

オスマン大臣との面会で詩を読んだ小沼隊員（左端）。バングラデシュの言葉や文化を尊重した働きかけが功を奏した

また、こんなことも。庄子さんの配属先のボリシャルはなまりが強い地域。ある日、ダッカの業界団体幹部を前にIT人材育成についてベンガル語でプレゼンをすると、幹部たちが庄子さんを指さしヒソヒソ話しながら笑い始め、日本側関係者が戸惑うなか、大声で笑いだした。「ごめん、ごめん。君、すごくなまっているよ。方言うまいねぇ」。

「日本人が現地語を話すのも珍しいうえに、地方のきついなまりがおかしくてたまらなかったようです」（庄子さん）。場はなごみ、この団体から多くの協力を得られるようになった。

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：同じ専門職のCPや同僚とうまくいかない

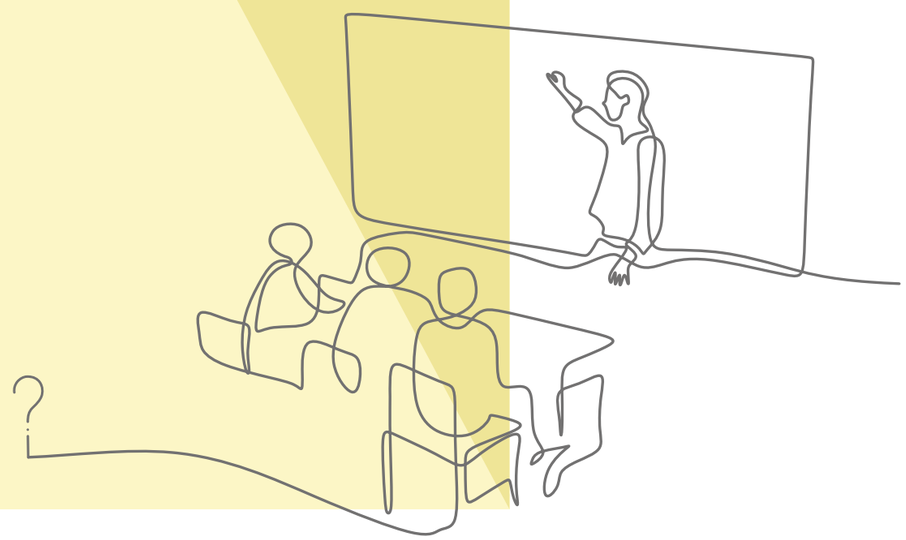
今月のお悩み

配属先に技術を紹介しようとすると、同僚たちから反発を受けてしまいます

（教育分野／中南米／女性）

任地の小学校で先生たちに授業方法の指導を行っています。生徒が楽しく学べるよう、日本式の授業方法や、日本から取り寄せた教材を先生に提案したのですが、反応が思わしくありません。強く勧めようとすると、「それなら自分でやればいい」と反発されてしまいました。

試しに新しい授業方法を実施すると、生徒たちは楽しんで授業に取り組んでくれるので、やり方は間違っていないと思います。どうすれば、先生たちにも気持ちよく積極的に参加してもらえるのでしょうか。



渡邊先生からのアドバイス

CPたちのやり方を聞き、さりげなく自分のやり方を示す まずは現地式を尊重する姿勢を忘れずに

今月の教える人　渡邊雅行（わたなべまさゆき）さん

ネパール／作業療法士／1986年度1次隊・愛知県出身

隊員時代はネパールの首都カトマンズのリハビリテーションセンターで活動し、入所者の機能訓練や日常生活指導に従事。任期延長して取り組んだコミュニティ・ベースド・リハビリテーション（CBR）がライフワークとなる。常葉大学准教授を経て、現在は富山県内の精神科病院で作業療法士・理学療法士として勤務。JICA海外協力隊技術顧問（リハビリテーション分野）を務める。

私が技術顧問として相談を受けたり、事例を聞くなかでも、カウンターパート（以下、CP）たちとの人間関係に苦労される隊員は少なくありません。特に同じ専門同士という場合、現場での主導権の問題が起こりがちです。隊員は技術指導で赴いている一方、相手は長く配属先の現場で働いてきた経験があり、自国の事情には自分のほうが通じているとのプライドや責任意識も持っているので、考え方の衝突が起こってしまうのです。この状況が進むと、「もうあの日本人から指導されたくない」「一緒にいたくない」などと決定的な亀裂にまで発展しかねません。

私が関わっている職域でいえば、理学療法士などは途上国においてもすでに人材が多く、しかも現地では高学歴のエリートでもあることから、外国からやって来たばかりの隊員からの口出しを不快に感じてしまうケースがあるようです。他方、私自身は隊員時代には作業療法士としてネパールへ派遣されたのですが、現地には作業療法士の養成学校すらなく外国人ボランティアしかいない時代でしたので、知識を持った人が来てくれたということで喜ばれました。やはり、現場でお互いの職分が重なると難しい部分が大きいのだと思います。

そうした状況でお薦めしたいのは、現地でどのような治療法や評価法を用いているのか、まずはCPに聞いてみることです。いきなり日本のやり方を伝えようとするのではなく、相手の知見を尊重して接すれば、喜んで話してくれて、それでは日本ではどういう方法を取っているのか？という質問への流れもつくりやすいはずです。私は訓練生への研修のとき、最初は言葉も何もわからないのだから、まずは生活習慣を学ぶことから始めるようにと話しています。活動に関わる技術や知識も同様と言えるでしょう。

ただ、相手が関心を持つまで待つと、時間がかかるのが難点です。任期の終盤近くになってようやく日本での臨床技術を教えてほしいと請われたというケースも聞きますので、決して活動期間が長いとはいえない協力隊員の場合、いたずらに待ち続けるわけにもいきません。

そこで、もう一つのアプローチとして、自分が何をやっているのかそれとなく見せるのもよいでしょう。医療系でいえば、自分が関わった患者のカルテを現地語で作成し、言葉の添削などをCPにお願いするという手があります。記録や資料を、何げなく目に入る場所に置いておいたという隊員もいました。もちろん、実際の作業をさりげなくCPに見えるところで行うのも良い方法だと思います。

任期終了後、私は首都カトマンズ近郊の村で保健サービスに関わっていた元CPのネパール人を訪ね、一緒に村内の家を訪問したことがあります。そこで熱を出してせきをしている子どもがいる家に行った際、居合わせたボランティアの学生とおぼしきフランス人の若者たちが元CPに「なぜ病院へ連れて行くよう親に言わないのか」と訴えてきて、それに対して元CPが怒った場面がありました。元CPは元来温厚な人物なので私も驚いたのですが、その子の親にはお金がなく、連れて行きたくとも行けない事情があったようです。そうした現地の事情を知らずにわかったようなことを言われると、やはり腹が立ったのでしょうね。これも、「なぜ病院へ行けないのでしょうか？」などと問いかけるようなスタンスから入れば、反応は違ったかもしれません。

協力隊員は現地の人たちと共に暮らし、外部からはわかりにくい生活上の事情を把握しやすい立場にいます。その強みも生かしながら、バランス感覚よく活動を進めていただきたいと思います。

Text＝飯渕一樹（本誌）　写真提供＝渡邊雅行さん　※質問は現役隊員やOVから聞いた活動中の悩み

この職種の先輩隊員に注目！

～現場で見つけた仕事図鑑

#0017

「マーケティング」

分　　類：商業・観光
派 遣 中：7人（累計：108人）
類似職種：経営管理、コミュニティ開発

※人数は2022年11月末現在

CASE 1

濵崎優磨（はまさきゆうま）さん
タイ／2018年度2次隊・福岡県出身

PROFILE
空気圧縮機メーカーや化学薬品専門商社で技術職および営業職に従事。九州大学大学院でMBAを取得後、海外協力隊に参加。新型コロナウイルス感染拡大のため、タイでの任期は1年半にとどまった。現在はJICA中国に所属し、中国地方と開発途上国をつないでいる。

配 属 先：サケオ県コミュニティ開発局
要請内容：タイ政府が推奨している一村一品運動であるOTOPプロジェクトに、販売促進や販路拡大で貢献する。

CASE 2

薬師川智子（やくしがわともこ）さん
ケニア／2013年度3次隊・奈良県出身

PROFILE
米国の大学を卒業後、農林中央金庫に入庫。長崎県内のJAバンク業務支援などを2年3カ月担当。「一生をかけて取り組みたい仕事」は見つけられず同庫を退職。海外協力隊での任期終了直後にケニアに戻り、2016年に「アルファジリ・リミテッド」を起業。

配 属 先：ニャンザ州ミゴリ郡の農業省
要請内容：地域農家を巡回し、大豆および大豆製品の開発、市場開拓、販売戦略の立案と推進を行う。

活動の基本

マーケティングに近道なし。先入観を捨て、商品の売り方を突き詰めて考え、実行する

市場の分析結果をもとに商品を開発し、価格と販路を決め、その魅力をアピールして販売を支援する。マーケティング職種がやるべきことは多岐にわたる。商品やサービスを売るための仕組みづくりのすべてが活動範囲になり得る。生産者自身でも気づかない商品の魅力を客観的な視点で引き出せれば、収入の向上につながる可能性もあり、マーケティングへの潜在ニーズは高い。

CASE 1　商品を知るために自ら制作 思いが伝わるPR動画に結実

タイのサケオ県コミュニティ開発局にマーケティング隊員として赴任した濵崎優磨さん。要請内容はタイ政府が主導するOTOP（オートップ・One Town One Product）と呼ばれる一村一品運動の販売促進や販路拡大だ。日本ではBtoB商品の営業担当者としてのキャリアがあり、経営学修士（MBA）も取得している濵崎さんにはふさわしいテーマだった。

しかし、タイ全国で商品数が約5万5千点にも及び、サケオ県だけでも数多くの商品数があるOTOP。パッケージや販売ルートはすでに出来上がっていた。そのため、すぐにはやるべき業務が見つけられなかった濵崎さんは担当者の会議に同席させてもらい、OTOP商品を一つずつ手に取ることから始めた。

「国内向けではなく、タイにいる日本人駐在員、旅行者などに向けた商品の販売促進を手がけようと思いました。それならば私の感覚でも売れるか否かを判断できるからです」

8カ月後にようやく巡り合えたのが精巧な竹細工だった。タイの伝統的な技術で細く割いた竹を編み、カラフルな模様が表現されている。ボールペン、コップ、スマートフォンケースなどの小物があり、日本に持ち帰る土産物にもピッタリだと直感した。

竹細工を制作している一家にホームステイをして、商品を知るために自分でも竹を編んだ。

数日間の出家体験をするなど、タイの文化になじむ努力をそれまでに重ねてきた濵崎さんは、現場でも信頼関係を築き、「いいものを作って収入を得たい」という生産者たちの思いを肌で感じた。

その結実が、濵崎さんがデジカメで撮影して編集した1分半の動画である。代表の女性が制作のこだわりと商品への思いを自分の言葉で語っている。誠実なものづくりへの姿勢と商品の魅力が伝わってくる、濵崎さんでなければ撮れなかった作品だ。

日本語字幕を入れたこの動画はサケオ県コミュニティ開発局のSNSに掲載されたほか、タイにおける日本人会のバザーの販売ブースで放映。1本500バーツ（約1750円）のボールペン100本をほぼ完売した。

膨大な商品の整理と絞り込みからマーケティング活動を始めた濵崎さん。商品が決定してからは制作現場に入り込み、唯一無二のプロモーション動画の制作を成し遂げた。

CASE 2　"決めつけ"をしないことがマーケティング成功の秘訣（ひけつ）

海外協力隊の2年間は失敗を重ねただけと苦笑いする女性がいる。帰国直後に、派遣先だったケニアに戻って農産物の加工販売会社を起業した薬師川智子さんだ。

ケニアのミゴリ郡にある大豆農家組合に派遣された薬師川さん。大豆加工品の開発支援、市場開拓を行うのが要請内容だった。現地には大豆をローストしてきな粉にする施設もある。

大豆のマーケティングを通じて貧困者の収入向上に貢献したいという思いが強い薬師川さん。ケニア人に定番の揚げパン「マンダジ」にきな粉を混ぜ込んだ商品を現地で開発し、現地の女性と組み、路上販売を行った。香りも味も良く、小麦粉の分量が少ない分だけ健康的な商品だ。多いときは200個を売り上げた。

「評判は上々でしたが、私はなぜか『安い値段でなければ売れない』と決めつけてしまったのです。通常のマンダジと同じ1個5円程度で売ってしまったので原材料費が高くなった分だけ損してしまいました」

やがて薬師川さんは、マーケティング以前の「生産と流通」の段階にこそ、問題があると感じるようになった。

個々の農家はやる気はあるが、生産物である大豆を効率的に集めて持続可能な値段で販売する成功体験がなく、農家組合はほとんど機能しておらず、売る仕組みが出来ていなかった。

そこで20軒の大豆農家に自ら声をかけた薬師川さん。集まった3トンの大豆を購入し、それにマージンをつけて買ってくれる取引先を見つけたが、だまされて1円も回収できず、その直後に任期は終了してしまった。

しかし、悔しい経験は現在の会社経営に生かされている。競合と比べて自社は顧客にどのような価値を提供すべきかを突き詰めて考えて実行した結果、オシャレな小瓶に入れたみそがヒット。レシピ動画を作成し、みその利用方法も同時にアピールしている。自社店舗だけでなく、ケニア全土のスーパーに並べるために増産し、マーケティング戦略を立案中だ。

「"決めつけ"をしないことが大切。農村だから安くないと売れない、という観点からしかアイデアを出せないのは良くありません。私は、5円のマンダジを10円で売ってもよかったのです。この値段では売れない、この人たちは同じものばかり食べている、そう決めつけたときに、マーケティングの道は閉ざされる」と薬師川さんは言う。

❶濵崎さんが制作したPR動画には丹精込めて制作した商品を手にする生産者たちの笑顔が映っている
❷日本人会バザーで竹細工グッズを販売する濵崎さん
❸大豆の収穫を喜ぶケニアの農家の方々と薬師川さん

Text＝大宮冬洋　写真提供＝濵崎優磨さん、薬師川智子さん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

竹田憲弘（たけだ のりひろ）さん

（ルワンダ／コミュニティ開発／2015年度3次隊・熊本県出身）　大学卒業後、メーカー営業を経て、協力隊に参加。「水の防衛隊」として現地隊員と共に、小学校やセカンダリースクール（中学校・高校）の水衛生改善に取り組む。現在はルワンダでスタディツアー、オンラインイベント、情報発信を行うAfrica Note Ltd.を運営。

手洗いの大切さを教えるのが衛生教育の第一歩

協力隊時代は、東アフリカのルワンダで「水の防衛隊」としてグループで学校に赴き、衛生教育を行った竹田憲弘さん。「そもそも手洗いが面倒くさい、学校に水道がないから習ってもしょうがないなど、手洗いに対する意識の低い子が多かったので、いきなり手洗いをするのではなく、まず図で説明したり、絵を描いたりして、なぜ手洗いが大事なのかを実感してもらうようにしました」

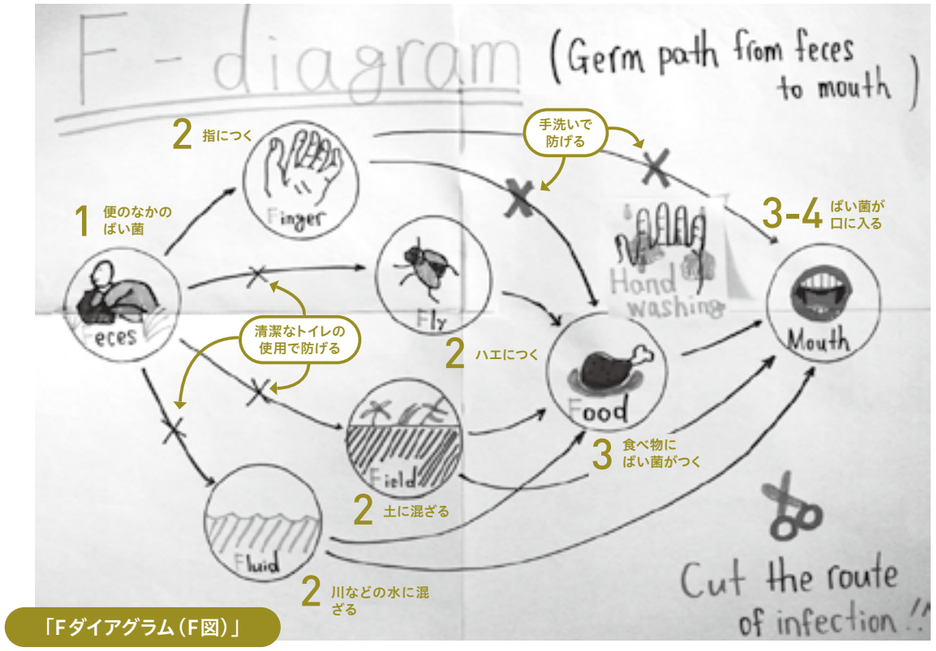
本題に入る前には、日本語の歌を歌ったり、劇をしたりとアイスブレイクを設けた。「アイスブレイクで盛り上げると、心理的距離が近くなり、話も聞いてもらいやすくなります。水の防衛隊の先輩隊員の工夫を受け継ぎ行っていました」。

アイスブレイクでは、みんなで「上を向いて歩こう」を日本語で歌う。そのほか、早口言葉や伝言ゲームを行うこともある

＼ 手洗いの大切をレクチャー ／

Fダイアグラム

手洗いの大切さを伝えるために「Fダイアグラム」という、ばい菌が体内に入るルートを表した図を使います。「どんなFがあると思う?」と生徒にクイズ形式で問いかけながら、どうすれば感染症を予防できるか説明。その後、手洗いの方法を教えます（左ページの囲み参照）。



「Fダイアグラム（F図）」

1「便（Feces）」に由来するばい菌は、**2**「指（Finger）」「ハエ（Fly）」「土（Field）」「水（Fluid）」や**3**「食べ物（Food）」など、「F」が頭につくポイントを通じて、**3**または**4**の「口」に入っていく。「指」から「食べ物」「口」のルートは手洗いで、「便」から「ハエ」「土」「水」のルートは清潔なトイレの使用でカットできて、結果的に下痢や回虫を予防できると説明する。

＼ 手洗いの良さがわかる ／

WASHお絵描き

「手洗いをすると、どんないいことがあるか」を意識してもらうために効果的なWASHお絵描き。WASHとは“Water, Sanitation, Hygiene（水・衛生・保健）”の頭文字を取ったもので、「ただ洗うだけでなく、やらないと病気になるし、遊びにも行けないよ。だからWASHは大事だよね」と啓発する意味合いがあります。

①以前は下痢になっていた ➡②手洗いをするようになった ➡③元気になってサッカーができるようになった、というふうにストーリーをつくる。

絵を使ったストーリーづくり

WASHにつながる行動を取ることで、健康になったら、自分たちの好きなことができるよということを伝えるために、3ステップでストーリーづくりを行う。

Step1：病気になっていた（下痢や回虫）

Step2：WASHにつながる行動を取った

Step3：その結果、元気になって好きなことができるようになった

自分の好きなことを③に当てはめて考えてもらうとモチベーションがアップします

ダンスで手洗い

日本ユニセフ協会が制作した、手洗いで洗うべき6カ所が楽しく学べる「世界手洗いダンス」の要素を分解し、ポイントを図解しました（右図）。**1**「手のひら」**2**「爪」**3**「親指」**4**「手の甲」**5**「指の間」**6**「手首」をしっかり洗う大切さを伝えたあと、動画に合わせて洗うと効果的です。

https://handwashing.jp/

Text＝池田純子　写真提供＝竹田憲弘さん

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

協力隊時代に習得した スペイン語と バイタリティを生かして 念願の仕事へ

今月の先輩

豊田恭輔さん Kyosuke Toyoda

ドミニカ共和国／環境教育／
2015年度3次隊・千葉県出身

就職先：
株式会社コスメック

事業概要：精密機器・油空圧機器の設計、製造、販売。海外にも営業拠点を持ち、自動車、工作機械、半導体および電機など、国内外のメーカーと取引を行っている。

豊田恭輔さんの略歴：

1989年	千葉県生まれ
2012年 4月	大学卒業後、都内の信用金庫に入庫
2015年 7月	信用金庫を退庫
2016年 1月	協力隊員としてドミニカ共和国に赴任
2018年 1月	帰国
2018年 2月	半導体の専門商社に入社
2020年 2月	同商社を退社
2020年 3月	株式会社コスメック入社
2022年 2月	グループ会社のKosmek USA, Ltd. Mexico officeへ出向

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

学生時代からeco検定（※）を受けるなど、環境問題に興味を持っていた豊田恭輔さん。幼少期はアメリカで過ごしたが、日本では英語が苦手なことがコンプレックスだった。大学卒業後、働きながら英語の勉強をしていたがなかなか身につかなかった。そんなとき、協力隊員募集の広告を目にし、「日本語を使えない環境に身を置いて語学を習得したい」という思いが芽生えた。調べると環境教育の職種があり、それならばと協力隊に応募した。

「任地には英語圏の国を希望したのですが、そちらは登録合格でした。一方、ドミニカ共和国ならすぐに行けると聞き、参加を決めました」

それまでスペイン語を勉強したことはなかったが、訓練所の2カ月間（当時）の語学講習でスペイン語の基礎をたたき込んだ。さらに任地でも、言語力に磨きをかけようと、活動の合間に現地のスペイン語教室に通った。

言語を自由に使いこなせるようになった豊田さん、任地では配属先の市役所、婦人会の会合、ホームステイ先の人たちと交流を深め、活動も軌道に乗るようになった。

帰国後に就職したのは半導体の専門商社で、日本国内の営業職だった。「当時は、とにかく就職先を早く決めて安心したかったので、内定が出た会社に入社しました」。

だがその後、協力隊で身につけたスペイン語を生かせる仕事をしたいと強く思うようになり、グループ会社がメキシコに支店を持つ株式会社コスメックへの転職を決めた。同社への就職を決めたのは、「のちの上司となる人が、採用面接とは別に私に会う機会を設けてくれ、私を採用したいという熱意が伝わってきたことが嬉しかったからです」。

「協力隊で身につけたスペイン語を生かせる仕事をしたい」という自分の思いに気づき、現在、メキシコ駐在員としてビジネスの現場に立った豊田さん。これからどんな活躍を見せてくれるのか、期待したい。

1 協力隊時代　2016年1月～

上：配属先のダハボン市の市長、副市長、婦人会連合の会長らへ活動の最終報告をする豊田さん
左：婦人会でコンポストの指導をする豊田さん

街のあちこちに生ごみが捨てられており、家庭では庭に生ごみを放ってある。ごみの分別が社会問題になっていることを知って、児童を対象とした環境教育と、事前研修で学んだコンポスト指導・普及活動を地域の方々に行うことの2点に活動を絞りました。具体的には、各コミュニティの婦人会の会合に参加しコンポストについて説明し、コンポスト作りを実践してもらいました。各家庭を訪問し、経過を観察しアドバイスも実施。任期中はひたすらこれを繰り返し、時には徒歩で10キロ近く歩いたことも。結果、2年間で100件以上の家庭にコンポストを設置しました。コンポストのメンテナンスを継続してくれている方や、配属先の市役所が活動を認めて交通費を出してくれるようになったときは、嬉しかったしやりがいを感じました。

2 協力隊時代に就職活動　2017年8月～

帰国したらすぐに就職したいという思いが強かったため、帰国半年前に転職サイトに登録。業種は問わず、国内の営業職で求人をしている会社約30社にエントリーしました。ドミニカ共和国からオンラインでリモート面接を行い、帰国後の最終面接を経て、半導体の専門商社への就職を決めました。

3 転職を決意～就職先探し　2019年11月

日本で就職したものの、スペイン語を仕事に生かしたいという気持ちが捨て切れず、スペイン語圏で日系企業が多く進出しているメキシコの現地採用に特化した転職エージェント2社に登録し、約15社にエントリーしました。就職先の条件はスペイン語を生かせることだけで、業界、勤務地は問いませんでした。

4 書類提出　2019年11月

提出書類 ▶**エントリーシート、履歴書、職務経歴書**

転職エージェントを通じ、メールで書類を提出しました。アピールポイントでは、協力隊の2年間の活動でスペイン語を身につけたこと、そして、活動内容を自分で考え、人間関係を構築しながら活動に結びつけていったことや、コンポスト設置を継続した粘り強さもアピールしました。

5 面接　2019年11月～12月

書類選考のあと、計3回の面接がありました。1回目はメキシコの駐在員、2回目はアメリカ現地法人の社長とオンラインで、3回目となる最終面接は日本本社で、社長、役員と行いました。面接では、新卒で入社した信用金庫、ドミニカ共和国での活動について多く聞かれました。金融の営業から協力隊活動まで、いろいろな経験をしていることに興味を持ってくれたのではないかと、個人的には思っています。

2020年1月に内定 ▶ 3月に入社

※eco検定（環境社会検定試験）®は複雑・多様化する環境問題を幅広く体系的に身につける「環境教育の入門編」として2006年の試験開始以来、学生から社会人まで幅広い方が受験している。

現在の仕事

日本で2年間の研修を受けたのち、2022年2月にメキシコ支店に赴任しました。スタッフはメキシコ人2人と私の3人です。私は日系企業の担当営業窓口として、自社の製品を拡販することが主な仕事です。メキシコ国内の展示会に出展したり、顧客を訪問したりしながら、製品を知ってもらうための活動をしています。商談相手の多くはメキシコ人で、言葉はもちろんスペイン語です。また、日系企業の日本人担当者とローカルスタッフの間に入り仕事を進める機会も多く、やりがいを感じながら働くことができています。

現在勤務している（株）コスメックの展示会

後輩へメッセージ

私はせっかちな性格なので、任期中に就職先を決めました。そこでの経験は無駄ではなかったのですが、自分が何をしたいのか、もう少し時間をかけて見極めたうえで就職活動をすれば、最初から現在のようなスペイン語圏の仕事に絞って行動ができたのではないかと感じています。後輩たちには、帰国後の仕事探しで焦る必要はないということを伝えたいです。じっくり自分がやりたいことを考えたうえで、就職活動をしてほしいと思います。

Text＝油科真弓　写真提供＝豊田恭輔さん

派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶ウガンダの村人のために起業

坪井 彩さん　Aya Tsuboi
ウガンダ／コミュニティ開発／ 2017年度3次隊・福井県出身

❶隊員時代、ウガンダの住民会議でSUNDAシステムのコンセプトを説明する坪井さんと村人たち
❷SUNDAユニットを設置したハンドポンプ式井戸。おのおのの IDタグをかざすと、チャージした料金分の水がくめるという仕組みになっている
❸株式会社Sunda Technology Globalの共同創業者であるウガンダ人エンジニア2人と日本人エンジニア1人と共に。SUNDAとは、現地のルガンダ語で「くみ上げる」の意

井戸の維持管理システムを普及させ、アフリカの水問題を解決したい

「なぜ重要な水源である井戸を修理するためのお金が住民から集められないのか」。そんな素朴な疑問が、水の防衛隊として派遣された坪井彩さんの取り組みの出発点だ。井戸が設置されたまま維持・管理が適切に行われていないという課題は、派遣前に学んでいたとおりだった。管理費回収の難しさに着目した坪井さんは、隊員活動中に従量課金型の自動井戸水料金回収システム「SUNDA（スンダ）」を考案し、その後、起業した。革新性のあるアイデアが評価され、2021年には第6回日本アントレプレナー大賞を受賞している。

理系大学院を卒業後、パナソニックのIT部門でデータ分析コンサルタントとして勤務していた坪井さん。社内ワークショップがきっかけで、学生時代から関心のあった途上国での社会課題解決への思いを強くした。そこで目に留まったのが、同社が行っていた、途上国向け人材を育てるトレーニングプログラムの募集だった。会社に籍を置いたまま民間連携でJICA海外協力隊員として途上国に1年間派遣され、復職後、同社の海外の販売会社で2年間勤務するものだ。「そのままIT部門にいればデータ分析の分野で活躍できる未来も見えていたので、挑戦すべきかすごく迷いました。でも、やりたいことがあるなら〝今〟やったらいいのでは？と踏み出すことに決めました」。

18年1月、コミュニティ開発隊員として、ウガンダの地方県庁に配属された坪井さん。ある日、村の代表と井戸修理費の回収に行くと、「子どもが病気」「今はお金がない」などの理由で半数以上の世帯がお金を払ってくれなかった。住民会議を開いて話を聞くと、回収したお金の管理への不信感があり、現金決済がネックになっている事情や、月額定額制の料金回収への不公平感があることがわかった。

そこで坪井さんが考えたのは、モバイルマネー（※）を利用した料金回収の仕組みだ。モバイルマネーはウガンダでも普及しており、チャージした分だけ水をくめるようにすれば不公平感もない。さっそく住民に提案すると「それがほしい！」と賛同してくれた。

アイデアを具現化してくれるエンジニア探しに時間を費やし、最後に残った2人と共になんとか初号基を設置したのは帰国直前の19年1月だ。「ほっとしました。応援してくれていた村の人たちはチームのようになっていて、完成を待ち続けてくれましたから」。

任期終了後も、SUNDA事業継続の道を模索した。しかし社内で事業化するのは現実的に厳しいことがわかり、悩んだ末に坪井さんが選んだのは会社を辞めて起業する道だった。「なぜそこまでしてSUNDAを継続しなければならなかったのかといえば、村の人たちのためです。初号基が設置された瞬間の彼らの顔と感謝の声は忘れられません。ここでやめたら、彼らの期待を裏切ることになると思いました」。

自ら株式会社Sunda Technology Globalを設立した坪井さんは、21年5月からウガンダの首都カンパラに拠点を移し、最前線でチームの指揮を執っている。会社には、SUNDAの開発から関わってきたウガンダ人たちのほか、日本国内で事業に携わる日本人スタッフもいる。「現在は、機器とオペレーションの改善と、実績づくりに注力しています。とりあえずやってみるウガンダ人と、石橋をたたいて渡る日本人。気質の異なる両者をワンチームとしてまとめるのは難しいですが、どんな仕事にも必要なのはパッション。お互いを尊重し、融合させることが大事だと思います」。

退職してウガンダへ戻った時点で8基だったSUNDAは、現在110基に増えた。機器の販売が主な収益源で、25年末までに2000基を設置し、黒字化を目指している。だが、坪井さんが見据えているのはさらにその先だ。

「まずはウガンダ全土、そしてサブサハラ・アフリカの水問題を解決するというのが一つの目標ですが、できれば水問題はさっさと解決して、SUNDAの仕組みをベースにした新しいサービスを展開していきたい。ウガンダの農村部にも優秀な若者たちはたくさんいるので、彼らが自らの手で未来を選択できる環境をつくってあげたいのです」

坪井さんが踏み出した一歩はイノベーションの種となり、ウガンダ、アフリカ、そして世界の社会課題を解決するために成長中だ。

Text＝秋山真由美　写真提供＝坪井 彩さん

坪井さんの歩み

1988年、福井県に生まれる。

将来の夢がない子どもでした。親から勉強しろと言われたことはないですが、ちゃんと勉強して進学校に行き、就職してお金を稼ごうと中学時代から決めていました。

2007年、奈良女子大学理学部物理科学科入学。

2回生のときにバスケットボールサークルでキャプテンになったことはリーダーシップの勉強になりました。

2011年、京都大学大学院で気象学を専攻する。

研究のために訪れたバングラデシュで、日本と何もかも違う途上国の様子に新鮮味と面白さを感じました。それまでの私は、〝日本＝すべて〟。海外に目を向ける意識すらありませんでした。

2013年、パナソニック株式会社のIT部門に入社。データ分析コンサルタントとして勤務する傍ら、16年と17年に社内ワークショップに参加し、途上国の社会課題に触れる。

2017年、社内のトレーニングプログラムに応募し、民間連携で18年1月よりウガンダへ赴任。SUNDAを考案し、開発に励む。

村人たちから、「新しいことするって大変だよね！」と励まされながら開発して、任期満了ギリギリで初号基を設置できました。

2019年、復職をしたあと2年間、南アフリカとドバイに駐在。

2021年、日本に帰任し、SUNDAの取り組みで第6回日本アントレプレナー大賞を受賞。退職を経て、5月にウガンダへ渡航し、本格的にSUNDAの普及活動を始動する。

ウガンダ赴任中からビジネスコンテストには応募していましたが、この受賞で背中を押してもらえました。

※モバイルマネー…銀行口座やクレジットカードを用いず、携帯電話やタブレット端末のみで決済を行えるサービスの総称

1京都府庁への表敬訪問の際、京都セットの贈呈に喜ぶ派遣隊員たち
2京都セットの福笑いで盛り上がる日本語を学ぶモロッコの学生たち
3お茶のたて方を教える茶道教室も出発前の隊員に好評

待ってます、あなたを！
各界からのエール
From
京都府JICA ボランティア応援団

派遣先で活用できる「京都セット」を贈呈

帰国した協力隊員の方々が、社会にその経験を生かしていこうとする際に、経済界とのマッチングが図れれば、成果が出やすいと考えています。そこで、京都府ＪＩＣＡボランティア応援団では、若い経済人を中心に会員を募り、現在はさまざまな分野の１０７社の会員企業が参加しています（会員総数１１０）。特に帰国者報告会に力を入れていて、各会員企業と帰国隊員が接点を持てる場としています。

京都府出身の協力隊員たちは、日本を代表すると同時に、京都も代表してくれています。そこで、出発前の表敬訪問時に、現地で活用できるようにと贈呈しているのが「京都セット」です。これまで１３８人の隊員に贈呈してきました（※）。

セットには、京都の伝統工芸品や食品など16品目が入っています。例えば、すごろくや福笑いなど現地でのコミュニケーションに役立つもの、京漬物、おだしと京麩（ふ）などの食品、お抹茶と茶わん、茶せんといったものです。派遣先でお茶を振る舞えるようにと、茶道教室も壮行会の前に開催しています。

エチオピアで理科教育活動をしている隊員さんは、生徒たちがペットボトルのキャップとボールペンの芯でこまを手作りしているのを見て、京こまを紹介したところ、皆、その美しさに感動し、自作のこまにも京こまをまねて模様を描きこんだりして、京都に興味を持ってくれる生徒も増えたそうです。

世の中から戦争をなくすためには、国同士が平和に話し合う必要があると思います。皆さんの活動は、途上国へのサポートになっているのと同時に、日本が尊敬される国になり、正しい主張を発信する力を持つことにも貢献しています。人生を豊かにするためにも、経験を積んでいただきたいと思います。

平井誠一さん
京都府ＪＩＣＡボランティア応援団 会長
ひらいせいいち ● 京都府出身。大学卒業後、山本海苔店を経て、京漬物の老舗・西利へ入社、２０１３年に代表取締役社長に就任。京都青年会議所第52代理事長、日本青年会議所副会頭などを歴任し、まちづくりと業界発展のために尽力している。

Text＝阿部純一（本誌）　写真提供＝京都府JICAボランティア応援団　※2022年度2次隊時点

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

カンボジア人の親切で予定外の昆虫食チャレンジ

カンボジアの特徴的な文化の一つに、昆虫食があります。日々の食生活に広く浸透しており、市場には調理済みのコオロギやタガメ、クモなどさまざまな虫が並んでいます。軽食やお酒のつまみのような位置づけで、若者でも普通にポリポリと食べているのが印象的です。おいしい虫の捕れる〝名産地〟とされる地域もあり、例えば私の任地コンポントムは、天然物のコオロギで有名でした。

そんな任地の特色を生かし、観光隊員としての活動で昆虫食ツーリズムを模索していた私。着任早々にトライした記念すべきデビュー戦は、アリとその卵が入った麺料理。思ったより〝虫感〟は薄かったものの、ちょっとした酸味とプチプチ感があり、心を無にしてかき込みました。それを機にだんだんと大きな虫にも挑戦していかねばと思いつつ、まだ抵抗感が捨て切れず、その後はなかなか手が出ませんでした。

そうして派遣から1年ほどがたったある日、長距離バスで首都プノンペンへ行く途中のこと。バスの隣席で意気投合したおじさんが「これ食べなよ」と買ってきてくれたのが、その地域の名産の巨大なタランチュラ（!）でした。

おじさんの親切をむげにもできず、図らずも2戦目にして〝ラスボス〟級の大物と戦うことに。恐る恐る口にすると、脚は甘辛い味つけとカリカリの食感で佃煮風だったものの、ブヨッと軟らかい胴体はなんとも微妙…卵を持っていたのか、数の子のような食感だったのを覚えています。ともあれ、これでだいぶ抵抗感を乗り越えられたように思え、誰にでも親切なカンボジア人のおせっかいには感謝しました。

Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

外屋彩子（ますやあやこ）
カンボジア／観光／２０１７年度３次隊・秋田県出身

JICA海外協力隊派遣現況

（2022年11月末現在）

現在の派遣国数
60カ国

（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	28	1
ガーナ	31	
ガボン	13	2
カメルーン	20	1
ケニア	28	
ザンビア	5	
ジブチ	3	
ジンバブエ	11	
セネガル	3	
ナミビア	9	
ベナン	5	
ボツワナ	12	1
マダガスカル	29	
マラウイ	20	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	12	1
ルワンダ	43	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	14	
インドネシア	2	
ウズベキスタン	7	2
カンボジア	28	
キルギス	6	
スリランカ	5	
タイ	17	3
タジキスタン		1
フィリピン	3	
ブータン	20	5
ベトナム	35	
マレーシア	10	5
モンゴル	4	
ラオス	18	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
ソロモン	1	
パラオ	16	3
フィジー	1	1

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	7	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	20	
チュニジア	14	
モロッコ	2	
ヨルダン	22	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		1		2
ウルグアイ		1		
エクアドル	8			
エルサルバドル	7			
キューバ		1		
グアテマラ	18	1		
コスタリカ	5			
コロンビア	5	1		
ジャマイカ	1			
セントルシア	9			
チリ	4	1		
ドミニカ共和国	16		6	
ニカラグア	3	2		
パナマ	1			
パラグアイ	17	2	1	
ブラジル			9	1
ベリーズ	3			
ペルー	17	1		
ボリビア	12	1	1	
ホンジュラス	3			
メキシコ	2	2		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	663 （272／391）	46 （34／12）	17 （3／14）	3 （2／1）	729 （311／418）
累計 （男性／女性）	46,492 （24,599／21,893）	6,605 （5,334／1,271）	1,561 （601／960）	550 （254／296）	55,208 （30,788／24,420）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

青年海外協力隊事務局長交代について

2022年12月1日付で青年海外協力隊事務局長が小林広幸氏から橘秀治氏に交代いたしました。橘新事務局長の挨拶は下記JICAウェブサイトで公開されています。

https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/activity/index.html

橘 秀治
青年海外協力隊事務局長

略歴●たちばな ひでは（インドネシア／市場調査／1996年度3次隊）1999年国際協力事業団（現JICA）に入団、米国事務所次長、人間開発部基礎教育第二課長、企画部総合企画課長、総務部審議役次長などを経て、現職。

AWARD

JICA海外協力隊OVが秋の叙勲での受章ほか、各賞を受賞

坪井達史さん（フィリピン／稲作／ 1975年1次隊・大分県出身）が2022年秋の叙勲で「旭日双光章」を受章されました。坪井さんはJICA稲作上級技術アドバイザーとして長年アフリカで活躍され、22年5月にはウガンダ政府から「ゴールデンジュビリー勲章」を、10月には杵築市から「市民栄誉賞」も授与されています。

弓場秋信さん（マレーシア／溶接／ 1972年度2次隊・鹿児島県出身、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長、弓場貿易株式会社代表取締役）が、22年度の鹿児島県民表彰（社会活動部門）を受賞されました。元進路相談カウンセラーでもある弓場さんは、18年春の叙勲で「旭日双光章」を受章。ほか、これまでにJICA理事長表彰、外務大臣表彰なども受賞されています。

一盛和世さん（サモア／公衆衛生／ 1976年度3次隊、長崎大学客員教授）は、第29回「読売国際協力賞」を受賞されました。一盛さんは太平洋の島しょ国で16年以上にわたり熱帯病「リンパ系フィラリア症（象皮病）」の対策に取り組んだほか、WHOの世界リンパ系フィラリア症制圧計画統括官を務められました。協力隊時代の一盛さんの活動は、クロスロード2022年1月号でも取り上げています。

https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/202201/pickup_01_16/index.html

NEWS

天皇皇后両陛下が帰国したJICA海外協力隊員と御懇談

JICA海外協力隊帰国隊員の代表が2022年11月4日、皇居（御所）において天皇皇后両陛下に御懇談の栄を賜り、任国での活動をご報告致しました。帰国隊員と両陛下との御懇談は、1965年に青年海外協力隊が発足した当初から今日に至るまで続いています。今回帰国したJICA海外協力隊員（2019年度2次隊員）は、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大の影響を受け、日本への一時帰国を余儀なくされました。しかし、日本での待機期間中に、オンラインでの支援活動や能力強化を行い、これらをまた現地に戻った際の活動に活かすなど、コロナ禍を乗り越えて派遣国での活動を終えました。当日、両陛下にお目にかかったのは青年海外協力隊2人（高林未稀さん ラオス／コミュニティ開発、大石祐助さん ルワンダ／マーケティング）と日系社会青年海外協力隊1人（浅井里美さん ドミニカ共和国／日本語教育）です。御懇談に先立ち、JICA本部（東京都千代田区）で田中明彦理事長と面談しました。 御懇談後、参加者からは、「両陛下とも、終始にこやかに興味深く報告を聞いてくださった。お優しいお言葉やお心遣いに感動した。」「協力隊に行くきっかけや行って良かったことなどについて、全員にご質問いただいた。」「現地の活動に関心を寄せてくださり、幅広くご質問いただいた。」などの感想をいただきました。また、御懇談終了後、天皇陛下より、一人ずつ、御言葉をいただきました。

前列左から高林さん、田中JICA理事長、浅井さん、後列左から大塚理事長室長、大石さん、内田青年海外協力隊事務局次長

NEWS

現役隊員がスリランカで日本文化紹介とサッカーワールドカップ観戦

日本・スリランカ外交関係樹立70周年を記念したイベントの一環として、クルネーガラのSputnik Schoolで日本語を学んでいる学生や学校職員たちに対して、スリランカで活動中の協力隊員4名が、浴衣・法被体験などの日本文化紹介や協力隊活動紹介を行い、その後ワールドカップ日本対コスタリカ戦を一丸となって応援しました。約150名の参加者たちの会場中に響きわたる「ニッポン！」という声援と拍手からは、“次は自分たちが両国の架け橋になる番だ”という熱い思いが伝わってきました。

クロスロード ［ 2023年1月号 ］

第59巻第1号　通巻683号
発行日　2023（令和5）年1月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

JICA事務局：今号の「みんなの教材づくり＆アクティビティ」は衛生教育。新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、以前より手洗いの重要性が高まっているのではないでしょうか。実は私も手洗いの啓発活動をしていました。私の中のポイントは〝楽しく〟です！（脇田雄気）

クロスロード編集室：P9で紹介した本『途上国の人々との話し方』は、聞き出し方のノウハウがぎっしり。これほど付箋を貼った本は他にありません。『南国港町おばちゃん信金』は失敗談も含めて楽しく読め、インドの熱気がよみがえりました。（干川美奈子）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

隊員めし

現地で作った日本食、日本で作る現地めし

フィジー

小此木奈緒（おこのぎなお）

フィジー／環境教育／2015年度1次隊・富山県

大学卒業後、都内の市役所に入庁。現職参加でフィジーの首都に隣接するラミ町の役場に環境教育隊員として派遣され、七つの学校のクリーンスクールプログラムの実施や、コンポストの販売促進に努める。任期終了後は復職し、廃棄物行政に携わっている。

現地で作った
日本食

「もんじゃ焼き」

もんじゃ焼きは、関東出身の父がよく作ってくれた料理です。フィジーの住まいはほかの隊員との共同生活だったので、新しく同居する隊員が赴任したときによく日本食を作りました。そのなかでも、もんじゃ焼きは関西出身の隊員にはなじみがないので、ホットプレートで作り方を説明しながら食事をするとすぐに打ち解けられました。皆でいろいろな話をしながら食事をした楽しい思い出が詰まったメニューです。ヘラがなかったので、ティースプーンを使って食べていました。

●材料（4人分）

- 小麦粉 …… 30g
- 水 …… 300ml
- ウスターソース …… 大さじ2
- にんじん …… 小1本
- みじん切りのキャベツ …… 好きなだけ（今回は1/6個を使用）

（以下は追加するお薦めの具材と今回の分量）

- キムチ …… 100g
- チーズ …… 50g
- シーフードミックス …… 130g

ほかにコーンなどを入れてもいい。量はお好みで。

●レシピ

❶小麦粉と水を混ぜる
❷ウスターソースとにんじん、キャベツ、好きな具を入れてさらに混ぜる
❸②からキャベツと具を取り出して焼き、ドーナツ状に土手を作る
❹土手の真ん中に残りの生地を流し入れ、火が通ったら出来上がり

<編集室で再現した感想>

難易度 ★★☆☆☆
達成感 ★★★☆☆

ホットプレートがあれば、具材はあるもので簡単にできて、皆で楽しめるので良いメニューだと感じました。だしを入れなくても、シーフードミックスやウスターソース、キムチでいい味になります。シーフードミックスは❷で混ぜる前にあらかじめ火を通して少し冷ましておくと火の通り具合を心配せず食べられるように思います。

<小此木さんからのアドバイス>

少ない材料でもでき、作りやすいレシピだと思います。食べごろの判断が難しいと感じられるかもしれませんが、小麦粉を溶いた白い生地に火が通って半透明になってきたら良い頃合いです。土手がうまくできなくても最終的にすべてに火が通れば、おいしく食べられると思います。

日本で作る
現地めし

「ココンダ（白身魚のココナッツマリネ）」

隊員連絡所を管理していたフィジー人の方のご自宅にお呼ばれした際、作っていただいた料理です。生の魚とココナッツミルクは一見合わなそうに感じましたが、食べてみると南米のセビーチェよりも優しい味で癖になり、「おいしい！レシピ教えて」とお願いした料理です。フィジーではフィジー人もインド人も食べるのが大好き。「お茶を飲んで」「もっと食べて」といつも声をかけられていました。砂糖たっぷりのミルクティー、指先から肘くらいまでの長さのツナサンド、甘いビスケットのモーニングティーに同僚が誘ってくれるので、朝食を抜いて出勤することもよくありました。

●材料（2〜3人分）

- タイの切り身（生食用） …… 1柵
- レモン汁 …… タイがつかる程度（50mlくらい）
- トマト …… 1個
- 紫玉ねぎ …… 半分
- きゅうり …… 半分
- ココナッツミルク …… 1缶（400ml）
- 塩・こしょう …… 適量

●レシピ

❶タイを一口大にカットし、レモン汁に2〜3時間漬ける
❷トマト、紫玉ねぎ、きゅうりを粗みじん切りにする
❸①タイの表面が白くなったら、②の野菜と合わせる
❹③がつかるくらいにココナッツミルクを加え、塩とこしょうで味を調える
❺冷蔵庫で冷やすとさらにおいしい

<編集室で再現した感想>

難易度 ★☆☆☆☆
達成感 ★★★★☆

タイの柵を使うことで、とても簡単にできるうえ、野菜もとれて周囲にも好評の一品でした。ココナッツミルクで甘ったるくなるかと思いきや、タイをレモン汁に漬けているので、さっぱりした味に。いいレモンが手に入らなかったこともありレモン汁も液体で市販されているものを使用したので、より手軽でした。

<小此木さんからのアドバイス>

ポイントは魚の表面が白っぽくなるまでマリネすること。現地の方にごちそうになったときは冷蔵庫がない家も多いためか常温でしたが、レストランでは冷えたものが提供されました。冷やしたほうがおいしいと思います。

レシピ・写真提供＝小此木奈緒さん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝千川 修

フィジー料理のごちそう。きれいな海でとれる魚介や降り注ぐ太陽を浴びたフルーツ

モーニングティーの定番は、甘いビスケットやツナサンド

職場のバーベキュー。楽しいことが大好きなフィジーの人々。イベントでは皆で同じ釜の飯を食べるのが恒例だった

クロスロード 2023年1月号
2023年1月1日発行（毎月1回1日発行）第59巻第1号 通巻683号 編集・発行 独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

モロッコでは女性だけでなく男性も仕事を得にくい。就職にもコネと会社への持参金が必要で、それがないために村一番の秀才が大学卒業後、無職で村に戻ってきたという現実も見た。「努力が正当に認められるようになると、子どもたちも夢を持てると思います」と蒲地さん（写真左から3番目）。写真は職人の女性たちと海にて

モロッコに伝わる刺しゅうが魅力 小麦粉袋を再利用して作るバッグ

2010年に北アフリカ・モロッコのワリリ村に村落開発普及員（現・コミュニティ開発）として赴任した蒲地里奈さんは、伝統のフェズ刺しゅうと出合った。表と裏にそれぞれ柄があり、表側だけ仕上げればいい通常の刺しゅうより難易度が高いものの、完成品はどちらも表にできる美しさがある。村の女性たちに代々受け継がれる技だが、業者に買いたたかれるなどして正当な収入を得られないでいた。折しも外国製ミシンによる機械刺しゅうが広まりつつあり、女性たちはミシンを導入したがっていた。

「ミシンでフェズ刺しゅうと似たものを楽に作れても、下糸を使う裏側の見た目は悪くほつれやすいです。フェズ刺しゅうは1本の糸で表裏をきれいに仕上げ、布地を補強します。その価値を熱心に説きました」。伝統工芸品・有田焼の産地、佐賀県出身の蒲地さんは、職人が伝統技を手放すと後継者が減る一方だと知っていたからだ。

そのうち現地で布の代用品とされていた小麦粉の袋に着目した。布目に沿って針を刺していく刺しゅうは、布目が細かいほど難易度が上がる。その作業は加齢で視力が衰えた職人には困難だが、繊維が密でない小麦粉袋には刺しゅうがしやすかった。そして任期終了後、小麦粉袋に刺しゅうをした商品をブランド化、作り手に優しい雇用創出を掲げ、20代～60代の女性たち15人と活動中だ。1年の半分はモロッコにいた蒲地さんもコロナ禍の約2年間は日本に帰国。その間もオンラインのやりとりで事業を継続した。数カ月に1度、日本に届く商品はサイズも精度も蒲地さんの指示どおりの仕上がりで、荷を解くたびに感動が込み上げた。

さらに22年5月、久々にモロッコを訪問したときのこと。「リナに見てほしい」と、職人の女性たちから作りかけの商品を差し出された。聞けば「刺しゅうの出来が悪く、これを日本に送るとリナに迷惑がかかると思ったから途中でやめた」という。「それぞれが自主的に品質の向上を目指し、自分たちの刺しゅうの技に誇りを持って仕事をしてくれていて嬉しかったですね」。

Text＝村重真紀　写真提供＝ダールアマル

＼ウチのこだわり／

OB・OGショップ

軽く丈夫な小麦粉袋のバッグのほか、現地の男性の雇用を創出するためモロッコのスーパーフードのキャロブやコスメオイルなども扱っている

小麦粉袋に刺しゅうを施す作業中。糸の色やデザインは蒲地さんが指導し、日本人好みの商品に仕上げている

SHOP DATA

DAR AMAL（ダールアマル）

経営者：蒲地里奈さん
（モロッコ／村落開発普及員／2010年度2次隊・佐賀県出身）
ウェブショップ
https://www.instagram.com/dar50350/

※展示販売会等で販売。インスタグラムに開催日程がアップされる。

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
ジャイカ JICA